

古宇利原B遺跡発掘調査報告書

—村道古宇利横田原線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告—

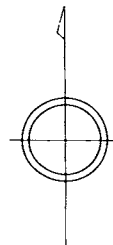


2004年 3月

沖縄県^{な き じん}今帰仁村教育委員会



遺跡分布図



古宇利原 B 遺跡発掘調査報告書

—村道古宇利横田原線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告—

2004年 3月

沖縄県^{な き じん}今帰仁村教育委員会

序

この報告書は、今帰仁村古宇利島における「古宇利横田原線道路改良工事事業」に伴って実施された、埋蔵文化財の記録保存を目的とした緊急発掘調査の成果を収録したものであります。

本遺跡の発掘調査は平成15年度に行い、調査終了後資料整理を実施しました。今回調査の行われた古宇利原B遺跡は、小字名古宇利原の東側集落はずれの畑地に形成されており、農耕機械等による耕耘により現況を著しく破壊されておりましたが、それでも多くの成果を得ることができました。特に今帰仁村における貝塚時代の様相の一端をつかめたことは大きな成果であり、今回出土した文化財は、我々の祖先達の生活や文化環境を知る上で貴重な歴史資料であります。

本書が多くの方々に有効に活用されることを希望するとともに、文化財愛護思想の高揚、諸開発計画における保存協議の円滑な推進に寄与することを期待します。

終わりに、本調査にあたり調査指導、報告書作成等で協力をいただいた諸先生方、また調査に参加協力くださった古宇利島の作業員の皆さんに御礼を申し上げます。

今帰仁村教育委員会
教育長 山城 清光

目 次

第Ⅰ章 古宇利原B遺跡の概要	
1 古宇利原B遺跡の位置と環境	1
2 古宇利原B遺跡の歴史概観	2
第Ⅱ章 調査の概要	
1 調査に至る経緯	3
2 調査経過	3
3 調査組織	3
4 調査地区	4～5
第Ⅲ章 層序	6～7
第Ⅳ章 遺構及び出土遺物	8～25
第Ⅴ章 これまでの調査資料	26～34
第Ⅵ章 総括	35～38
図 版	39～56

例 言

- 1 本書は平成15年度に今帰仁村教育委員会が村道古宇利横田原線道路改良工事に伴って実施した「古宇利原B遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、沖縄県今帰仁村字古宇利315-2番地ほかに所在する。
- 3 発掘調査及び整理作業にあたり次の方々から指導・助言をいただいた。
木下尚子（熊本大学教授）
- 4 本書掲載の現場における遺構実測図は玉城靖が作成した。
出土遺物の実測・製図は松本・上間・金城・鈴木・与那嶺・西谷が行った。
- 5 調査の記録及び出土遺物の保管は、今帰仁村教育委員会で行う。
- 6 調査時の撮影及び遺物の撮影については玉城靖が行った。
- 7 本書の作成・執筆・編集は玉城靖が行った。
- 8 遺物の実測はスケールを1/2～1/3、遺構図1/40、土層図1/50で統一した。

第Ⅰ章 古宇利原B遺跡の概要

1 古宇利原B遺跡の遺跡と環境

古宇利島は、沖縄本島北部の本部半島北東方向（N-36°、E-128°）に位置する約3.11km²の円形の島で、行政区は今帰仁村に属する。対岸の運天まで1.5km、一日五回往復する定期連絡船で約10分程の近距離にある。島の頂上からは、北に伊是名島、伊平屋島、西に伊江島、南から東にかけて本部半島の連山及び国頭の花々、加えて塩屋湾が望め、眼下に屋我地島を見渡することができる。

島は隆起珊瑚礁を基盤とし、三段の海岸段丘が認められる。上位面（標高75～100m）、中位面（標高35～60m）、下位面（標高10～30m）に区分される。これらは数十万年前～十数万年前に形成され、高い面ほど古い時期のものとなり、中央部が古生代石灰岩からなる。また島の北海岸（トケイバマ）には連続して発達する更新世琉球石灰岩の円筒状空洞地形が見られる。これは当時の海岸部に形成されたポットホールを原型とした地形が、その後の海面低下によりそれらの空洞に赤土が溜まり、その溶食により空洞が拡大していったものと推定されている（目崎1988）。海岸地形は南東部と東北部に砂丘が形成され、外周の70%は3～5mの隆起した岩縁で囲まれている。土壌は琉球石灰岩風化のマージで島全体を覆い、海岸地域はその被覆が薄くなる。

南側台地縁辺部には、今回調査した古宇利原B遺跡を含め3遺跡が知られている。また海を渡れば、渡喜仁から上運天の台地縁辺部及び崖下に渡喜仁浜原遺跡など、遺跡が多く集中している。加えて与那嶺の海岸一帯、伊是名島や屋我地島に同時代の遺跡が集中しており、沖縄の先史時代を考える上でも重要な遺跡が多い地域の一つである。

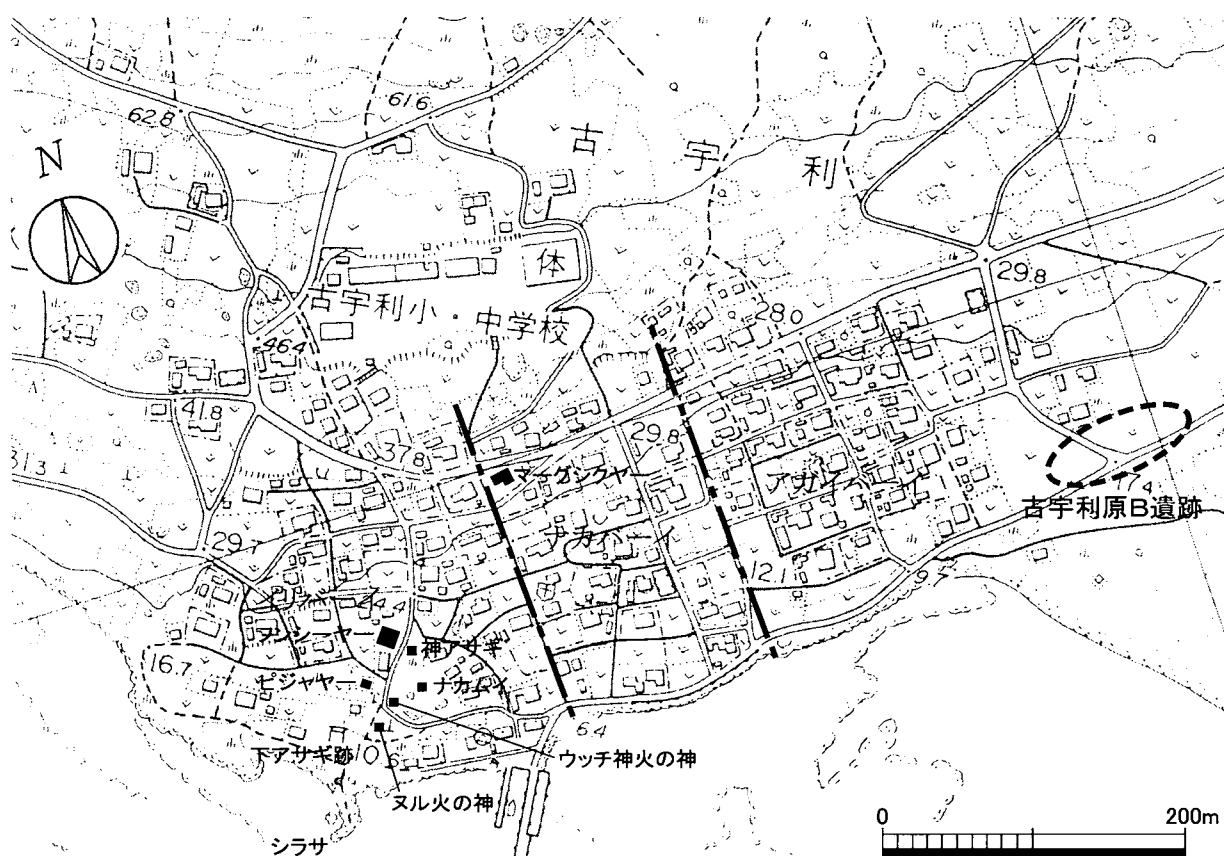


第1図 古宇利原B遺跡位置図 (S=1/50,000)

2 古宇利原B遺跡の歴史概観

古宇利島は、沖縄人類の発祥地であるという神話伝説の島で、サーザーウェー、海神祭等の古い民俗行事を残している。文献上では、海東諸国紀に「郡島」、琉球国高究帳に「沖ノ郡島」、乾隆帳に「古宇理村」、琉球国由来記には「郡村」、琉球一件帳「古宇利村」とある。古宇利島のことを方言では「フイ」また「フイジマ」、あるいは「クイ」、「クイジマ」と呼ばれている。フイやクイは「越えた」の方言とみられ、フイジマ・クイジマは海を「越えた島」と解される。また、人類発祥伝説から恋（コイ・クイ）あるいは恋島の字を当てたりすることもある（仲原1998）。同島は古くから今帰仁間切に属し、近世、古宇利島が果たした役割の一つに、首里王府の役人などが伊是名へ向かう時、古宇利がその手助けをする役目を担っていた。

古宇利には島の南側に発達したムラウチ（村内）と島の中央部にあるウイバル、それに島の北西にあるシチャバルからなる。ムラウチの集落は班の他に伝統的なアガイバーイ、ナカバーイ、イリバーイと三つに区分される。毎年旧暦7月最後の亥の日に行われる、ウンジャミ（海神祭）のハーリーのときは、その三つの区分で競漕する。ムラウチの中でもイリバーイの方にアサギや旧家、それに御嶽などがありムラの祭祀の場となっている。御嶽を中心としたムラの祭祀の集落形態がみられる（津波ほか1982）。島の世帯数は157戸、人口367人（平成14年10月現在）である。



第2図 古宇利原の民俗遺跡と地名

第Ⅱ章 調査の概要

1 調査に至る経緯

村内における埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和56年度～58年度に遺跡の分布調査が実施されて以後、これに報告された遺跡を「周知の遺跡」とし（上原ほか1984）、報告される遺跡については取り扱いに関して事前協議を図っている。本遺跡も周知の遺跡として知られている遺跡であるため、遺跡の一部に予定される工事に関して協議を行った結果、工事変更は困難で掘削工事が実施され、遺跡の一部消失が免れないことから、平成13年度に事前に範囲確認調査を実施した。その結果、保存状態良好な地点では厚さ30cm程度の遺物包含層が確認された為、工事が行われる区間について本調査を行い記録保存措置を講ずることを建設課と協議の上決定した。

2 調査経過

村道古宇利横田原道路改良工事に係る古宇利原B遺跡発掘調査は、平成15年度に今帰仁村教育委員会が実施した。同調査は古宇利港に隣接する古宇利原A遺跡より約400mほど東側へ行った畑地一帯を調査範囲として、平成15年11月4日より平成16年1月31日、調査対象地区約300㎡の調査を実施した。当該調査区は隆起珊瑚礁を基盤とした標高約16～19mの海岸段丘上に形成されており、北東から南西にかけて緩やかな傾斜地となっている。

当該調査区は農耕機械等による耕耘による破壊を受けており、加えて平成13年度の試掘調査では現況表土より地山岩盤まで約数十cmの堆積であった。このような保存状況から、調査開始時には遺物包含層はさほど検出されないであろうと考えられた。しかし、昭和56年度～58年度の遺跡分布調査では保存状態のよい土器等が表面採取されていることから、人力による表土の剥ぎ取り作業から開始した。表土（第Ⅰ層）の剥ぎ取りは従来よりサトウキビ畑であったことから、鋤等を用いて約2週間程度調査区全体の掘り下げを行った。第Ⅰ層の下からは遺構の確認ができなかったところでは遺物包含層が殆どみられず、すぐ岩盤に達した（約20～30cm掘り下げ）。そこで岩盤近くに達すると薄く削りながら遺構の輪郭を追い、岩盤を掘り抜く堅穴遺構と思われる輪郭が把握された。

堅穴遺構内だけでは第Ⅱ層（暗褐色土遺物包含層）がよく残っていたので、それをゆっくり丁寧に見出すことを心懸けた。これを契機に堅穴内の柱穴が検出され、炉跡や柱跡など堅穴住居跡の下部構造が解明され始め、合計6基の堅穴住居跡が検出された。発掘作業は常に安全に配慮しながら実施し、天候にも恵まれスムーズに作業が進行したことから、平成16年1月上旬には実測作業と完掘状況の写真撮影を終了し、現場での発掘調査業務を完了した。

資料整理は同年1月より実施し3月末には遺物の整理及び遺構図などの製図などを行った。本報告書の刊行をもって報告とする。

3 調査組織

発掘調査、資料整理、報告書の刊行を平成15年度に下記の調査体制で実施した。

古宇利原 B 遺跡発掘調査及び発掘出土品資料整理調査関係者

事業主体	今帰仁村教育委員会		
事業責任者	教育長	山城 清光	
	社会教育課長	諸喜田展生	
	今帰仁村歴史文化センター館長兼		
事務総括	社会教育課長補佐	仲原 弘哲	
	文化財係長	當山 清巳	
	文化財係	玉城 寿	
	文化財係	宮城 弘樹	
調査担当者	文化財係	玉城 靖	
発掘調査アドバイザー		金武 正紀	
調査補助員	臨時職員	仲宗根 淳	与那嶺 俊
資料整理指導		木下 尚子（熊本大学教授）	

発掘調査作業員（五十音順）

伊差川初美 金城美智子 島袋 忠雄 玉城 末子 玉城テル子 玉城 信江
玉城日出子 玉城 松枝 玉城美代子 照屋タツ子 照屋千代子 照屋 文子
仲宗根文子 比嘉 愛子 日高 寛人 松田カルザード・ユーラリア 山川 巖

資料整理（五十音順）

伊差川初美 上間 恵子 喜屋武春恵 金城千恵子 金城美智子 座間味桃代
鈴木 美和 玉城 信江 玉城 美都 知念亜紀乃 西谷紗衣子 西谷麻希子
松本 綾子 与那嶺いずみ

4 調査地区

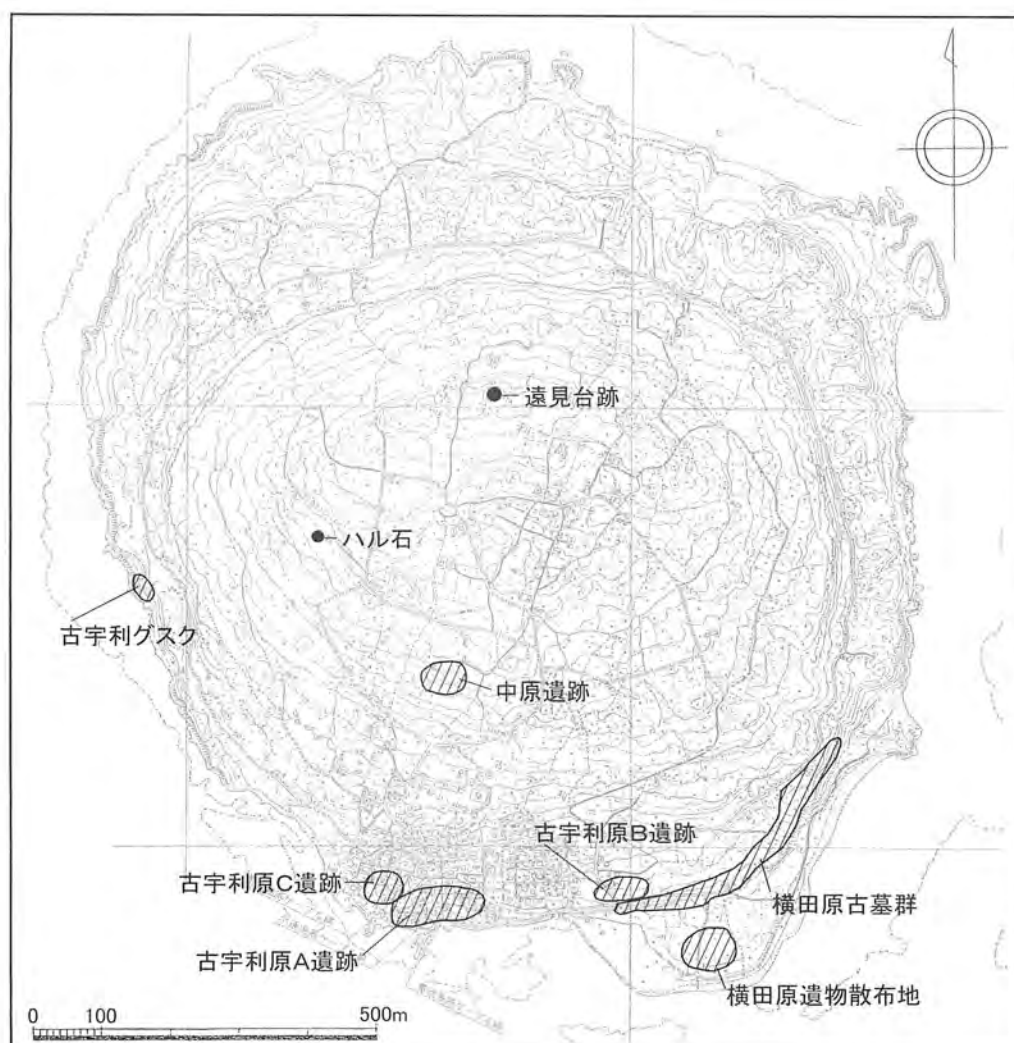
グリッドの設定は工事の際に用いる 4 級基準点 H13-13 ($x=76867.729$, $y=51958.335$)、H13-14 ($x=76899.638$, $y=51939.319$) を基準とし、任意の点 E-21 ($x=76870.000$, $y=51960.000$) を設け、5 m 間隔で西から東へ 15・16・17・・・、南から北へ E・F・G・・・の数字、記号を用いることにした。5 m×5 m の区画で下記のグリッドで実施した。また、遺構が調査区外へ延びていると想定された部分については遺構のプラン確認を目的として一部拡張部分を設けた。

I-16の一部・I-17・I-19の一部

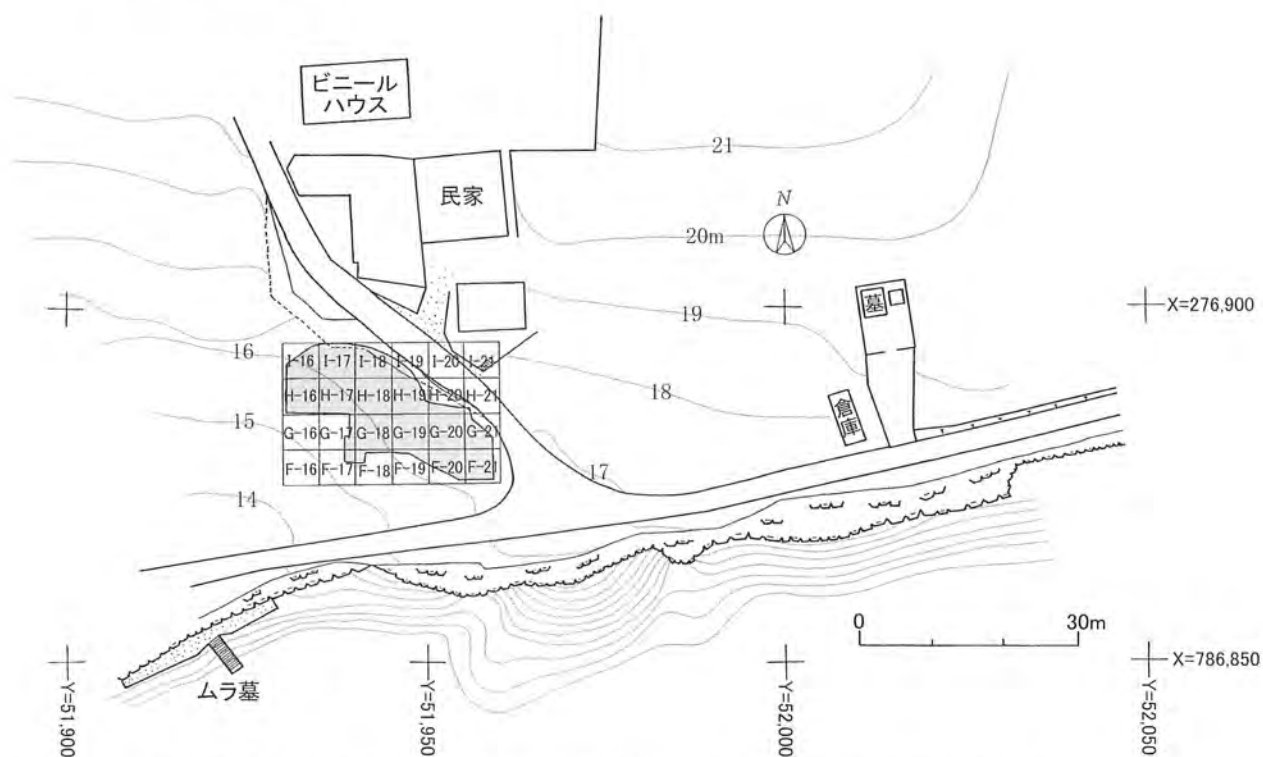
H-16・H-17・H-18・H-19・H-20の一部・H-20の一部（拡張）

G-17の一部（拡張）・G-18・G-19・G-20・G-21の一部

F-17の一部（拡張）・F-20の一部・F-21の一部



第3図 古宇利島の遺跡



第4図 古宇利原B遺跡発掘調査区 (S=1/1,000) ※アミ掛け部分調査範囲

第Ⅲ章 層 序

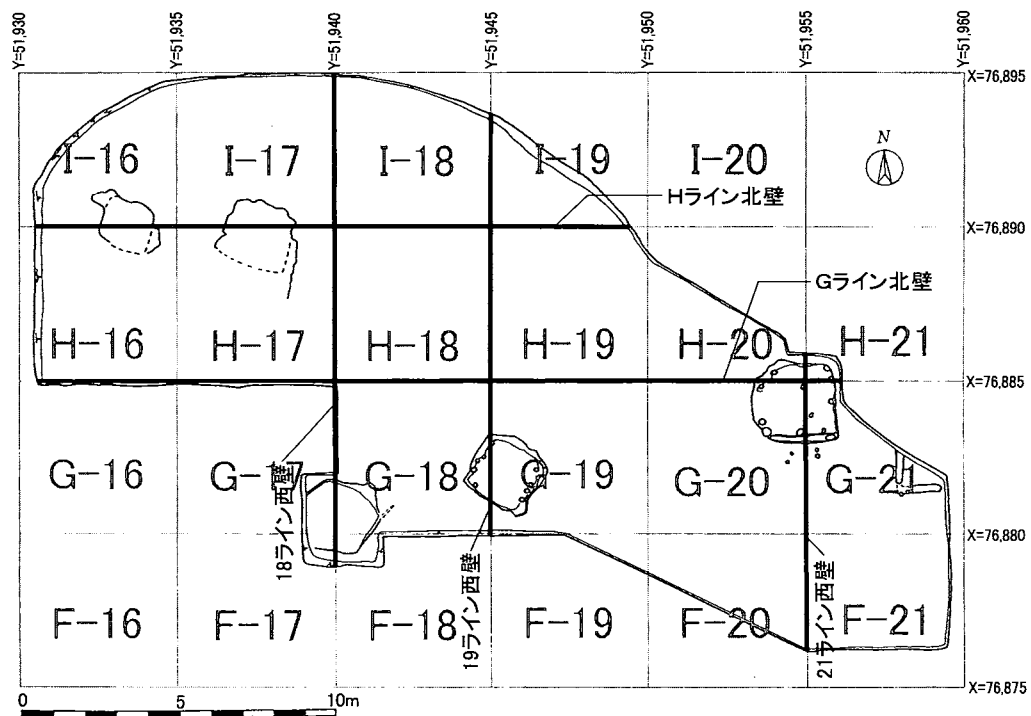
本調査区は発掘調査直前まで恒常的にサトウキビを栽培していた畑地であったところである。その為に堆積層は攪乱を深く受け、岩盤には耕耘機のスキ跡が残されている状況であった。幸い遺構等の落ち込んだ箇所はその影響を受けず、発掘調査は滞りなく行うことができた。基本層序は2枚からなり、第Ⅰ層が耕作土、第Ⅱ層が貝塚時代の遺物を含む遺物包含層である。以下、基本層序について記述する。

第Ⅰ層（暗褐色混砂礫層） コーラル（石灰岩）等の小礫を含む耕作土。農耕機械等により天地返しされ、土器や石器などの貝塚時代の遺物と空き缶や空きビンなどの現代遺物が混在する。平均約20～30cmの堆積で、南西側に向かって厚く堆積する。遺構面以外の殆どの調査区では第Ⅰ層直下は岩盤に達する。

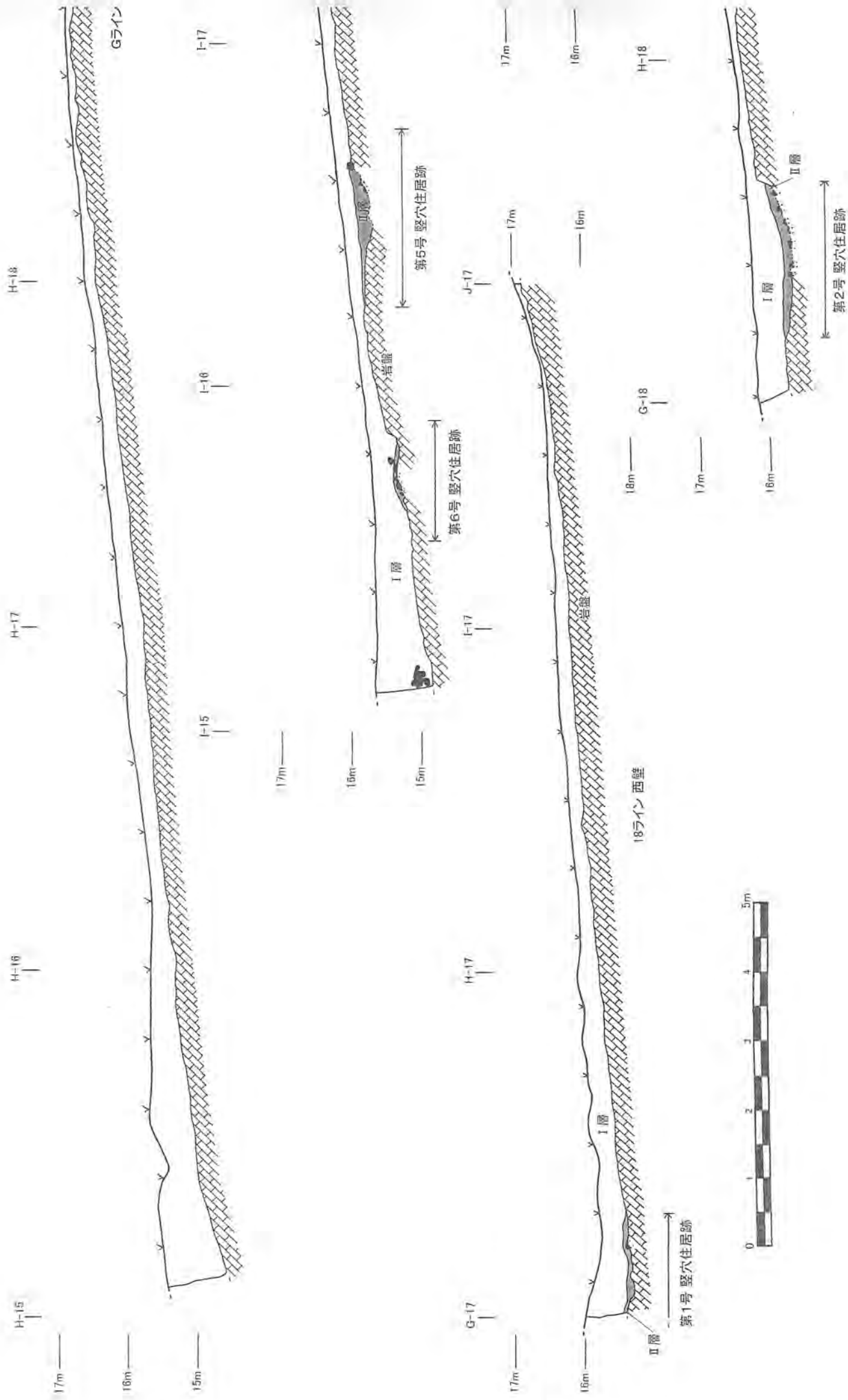
第Ⅱ層（暗褐色土層） 粘性が強く粒子の粗い土層。貝塚時代の遺物を包含する遺物包含層である。当該調査区では第Ⅱ層は殆ど残っていないが、自然に落ち込んだ箇所や竪穴住居跡遺構の落ち込んだ箇所は、農耕機械等の影響を受けずに堆積する。1～5cm堆積するところもあれば最大約20cm近く堆積する箇所もある。

第Ⅲ層（明赤褐色） 粘性のある粒子の細かい土層。方言でマージと呼ばれる赤褐色土層で、無遺物層となる。本調査区の範囲ではほとんど認めることができなかったが、調査区北側（H-17など）で残る。

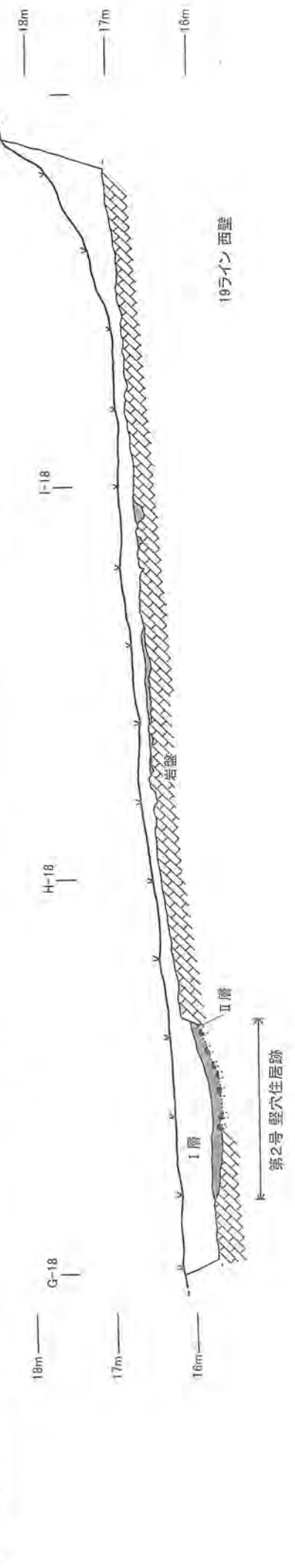
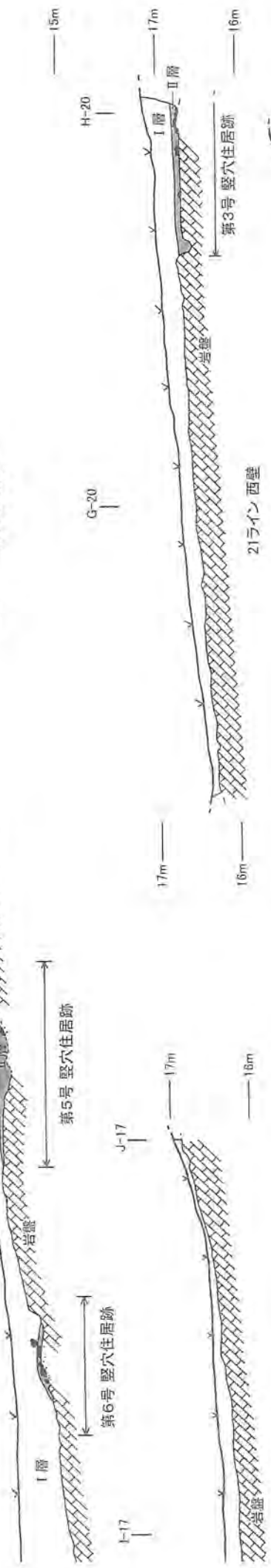
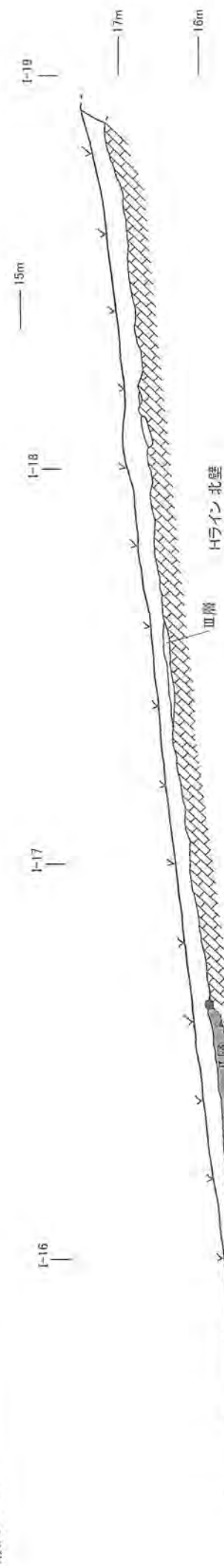
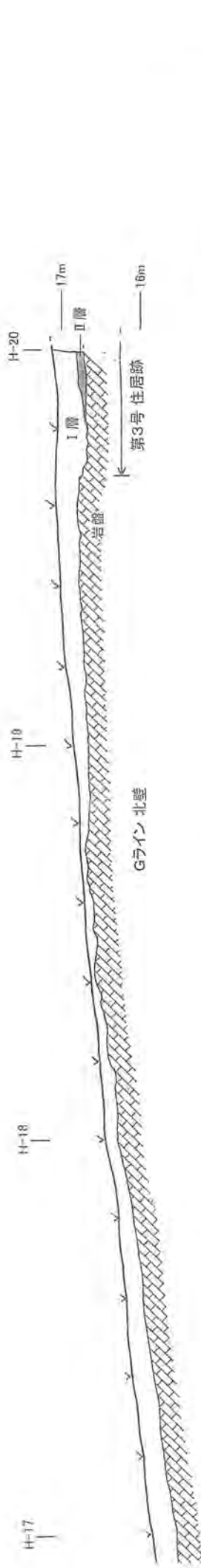
岩盤 石灰岩からなり、調査区東側では比較的平坦であるが、南西側に行くにつれて緩やかに傾斜する。竪穴住居遺構及び遺構内の柱穴は岩盤を掘り抜いてできており、斜面地を平らに仕上げる。調査区では一部地山層（赤褐色粘土層）が確認されたが、殆ど岩盤からなる。



第5図 土層位置図 (S=1/250)



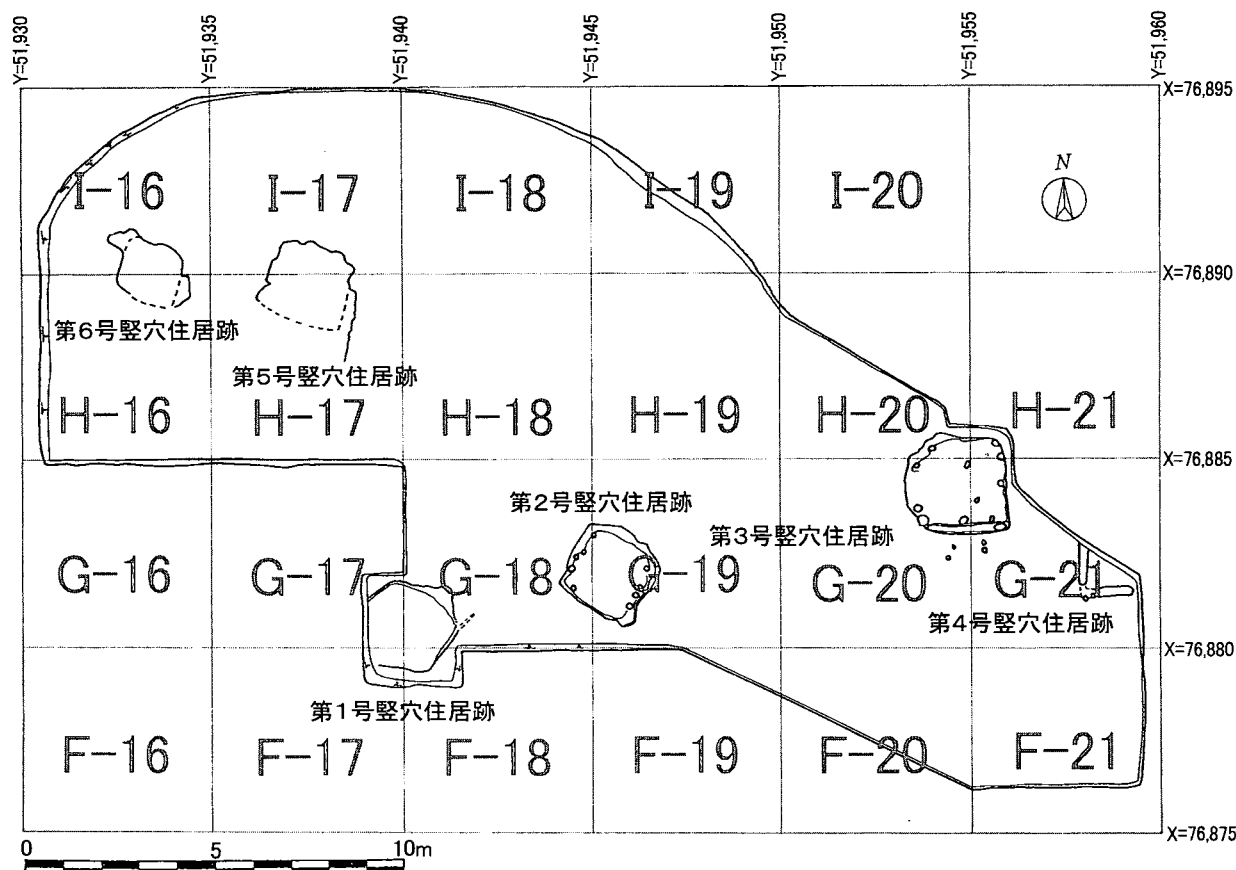
第6図 発掘調査区土層図



第Ⅳ章 遺構及び出土遺物

本調査区において第7図に示したように6基の竪穴住居跡を確認することができた。特に第2号及び3号竪穴住居跡は方形プランの良好な状態で検出することができたが、他の4基は判然としない所も多い。しかしその形態等から住居跡として扱うこととする。検出された竪穴住居跡は6基すべてが1辺約2m前後の小型の方形状の竪穴で、岩盤を浅く掘り込んでいる。中には深いものでは50cmを計る場所も認められる。総体的には本調査区は傾斜地である為、人が住むのには適してはいないが、岩盤を削ってフラットな床面を造り出しているところが大きな特徴である。竪穴内には火床と考えられる赤く変色した床面が認められており、炉跡と推定された。また、壁際には岩盤を更に掘り込んだ柱穴を巡らす。6基中第2号、第3号の遺構内覆土には、琉球石灰岩を主体に砂岩、粘板岩等の拳大の礫が確認された。これらの石は遺構の検出された石灰岩地帯では採集されないことから、持ち込みであると考えられる。これはシヌグ堂遺跡（金武ほか1985）等の竪穴住居跡で確認されているような壁面積目石や敷石が、耕耘作業もしくは何らかの行為によって壊され、遺構内に崩れ落ちたのではないかと考えられる。6基の遺構は発掘調査時にはそれぞれ出土グリッド名を冠し「落ち込み遺構」と仮称していたが、調査終了時には住居跡と判断し、竪穴住居跡として報告する。

遺物は層序でも述べたように包含層の堆積が殆ど無かったこともあり遺構外からの検出は近現代の遺物に混じり縄文時代の資料がわずかに出土しているが、いずれも小片であった。このため遺構内の覆土より検出された資料を遺構毎に報告する。



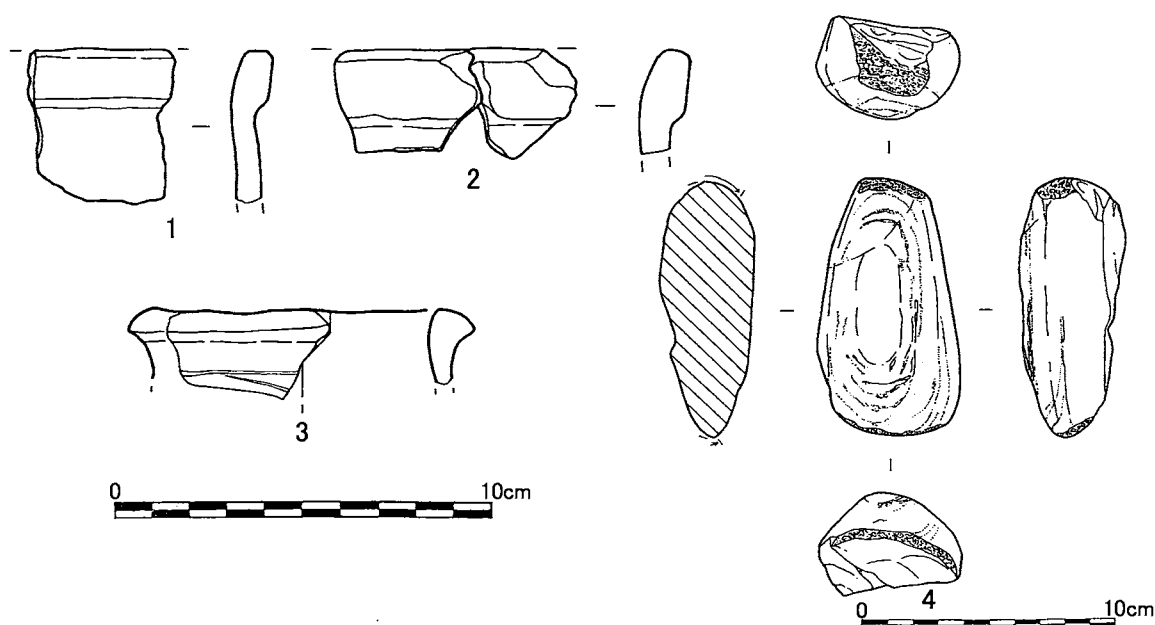
第7図 発掘調査区遺構配置図 (S=1/200)

第1号竪穴住居跡（第9図）

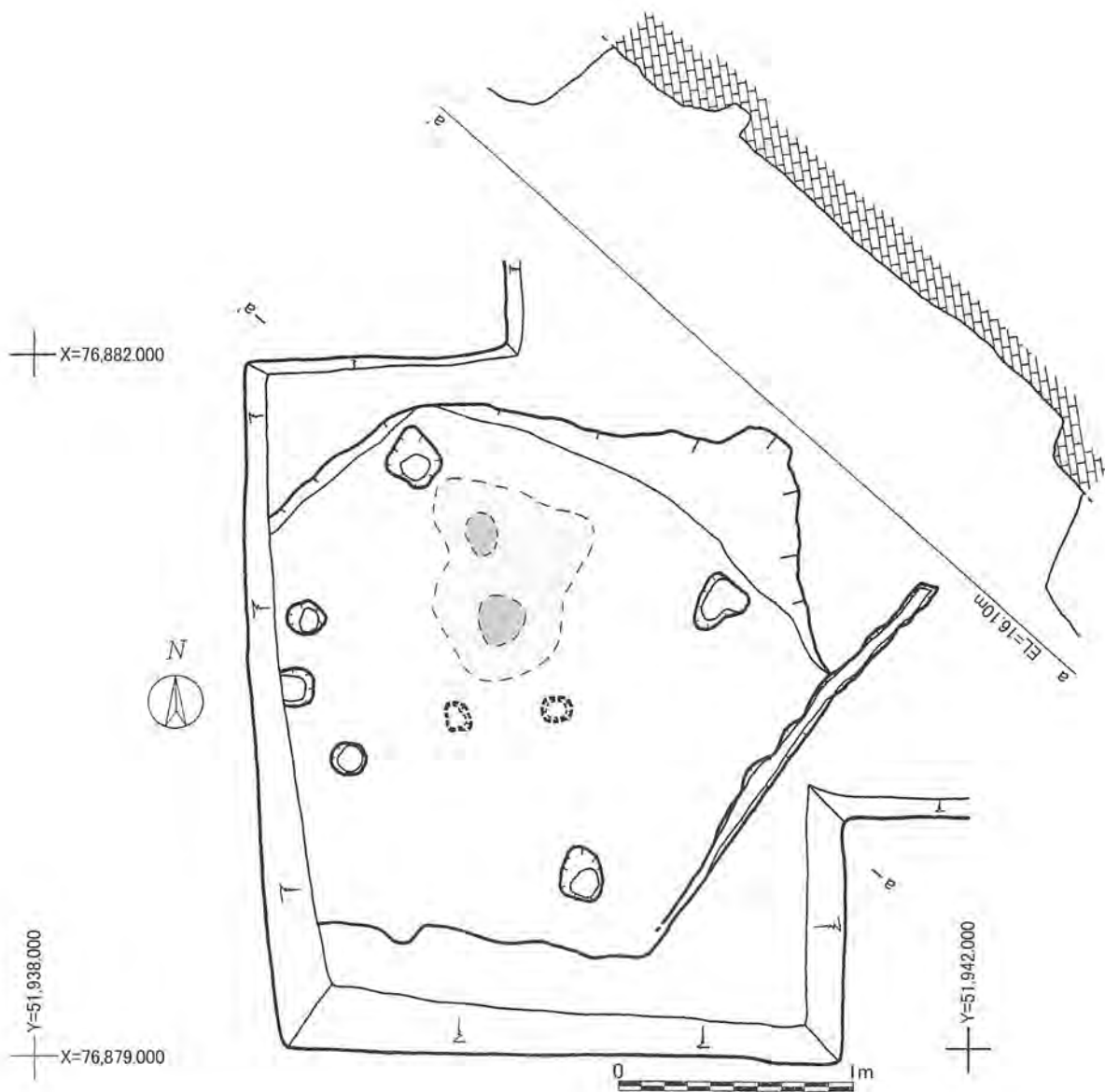
F-17、F-18、G-17、G-18グリッドで検出された。一部は調査区外へのびており、正確なプランは確認することができなかった。竪穴の掘り込みは明瞭でなく目立たない。竪穴内床面には火を受けたと思われる痕跡が認められ、岩盤が赤色に変色する。赤色の変色も単色ではなく本遺構内では灰オリーブ色と橙色に岩盤が変色しており、実際に実験し岩盤上でたき火を行った結果、火炎の中心部ほど黒化し縁辺部ほど赤変することが確認できた。このことから本遺構で確認された床面の変色も灰オリーブ色が火の中心部で、橙色の部分は火の縁辺部と考えた。住居跡内と考えた場合火受けの範囲が広がるように思われるが、赤色に変色した部分の形状は不定形で、中心部と思われる灰オリーブ色は2箇所認められることから造り替え等によるものと考えられる。灰層等は検出されなかった。また竪穴の覆土の状況は掘り込みが浅い為、第Ⅱ層（遺物包含層）の残っている箇所は5～10cm程度であった。柱穴は掘肩の径が約15cm、深さ8～20cmで、6箇所確認することができた。

第1号竪穴住居跡の出土遺物（第8図）

第8図1と2は肥厚帯が幅広になる肥厚口縁でカヤウチバンタ式土器と考えられる。1は若干頸部でくびれる。3は口縁部が肥厚し頸部に横位、斜位に沈線を施す。喜念Ⅰ式土器と考えられる。4は全体の半分以上を欠いた敲石の欠損品で、上下端に敲打痕を有す。丁寧に研磨されており、研磨の方向は明瞭である。残存部の長さは10.2cm、幅5.4cm、厚さ（残存）5.5cm、重量320gである。



第8図 第1号竪穴住居跡内覆土出土遺物



第9図 第1号竪穴住居跡

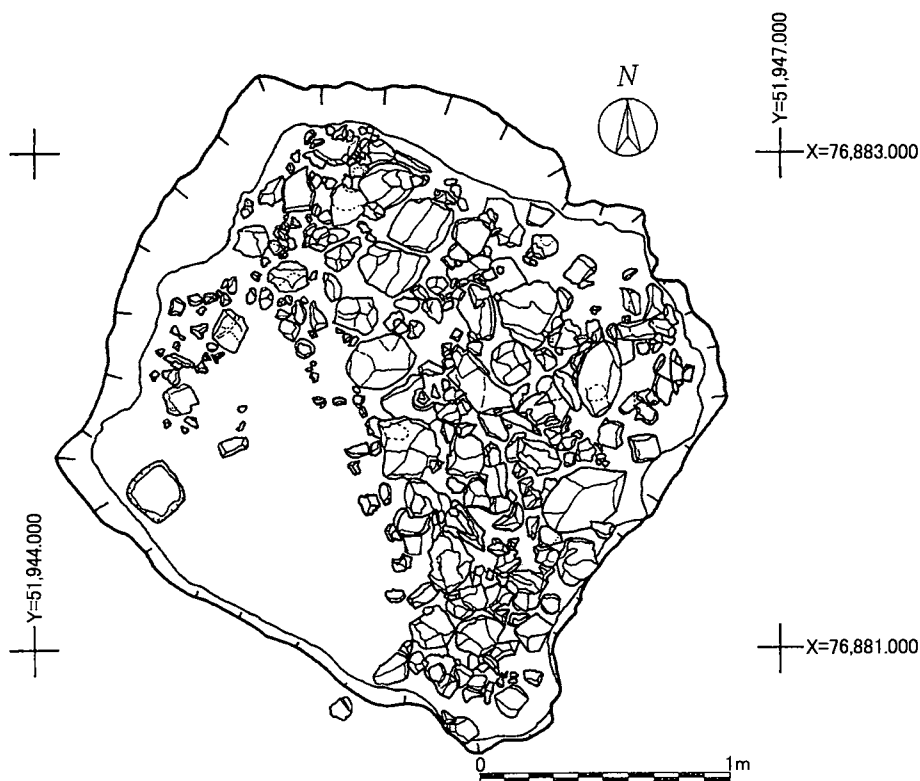
凡 例

	岩盤（立面のみ）		火受け（灰オリーブ色）
	地山（マージ）		火受け（明赤褐色）
	地山岩盤（平面）		火受け（橙色）

第2号竪穴住居跡（第10図、第11図）

G-18、G-19グリッドで検出された。6基の住居跡の中で最も残りのよい住居跡である。遺構内第Ⅱ層を掘り下げ中、遺構内から10～30cm大の礫が集中して検出された。これは壁面積み石や敷石が、住居廃棄後覆土に何らかの事情で埋没したものと考えられる。また耕作地であったために何らかの行為によって壊され、遺構内に崩れ落ちたのではないかと考えられる。礫は遺構の掘り込みの深い北東側半分に集中しており、掘り込みの浅い箇所では検出されなかった。石質は琉球石灰岩を主体に、古生代石灰岩、砂岩、チャート、粘板岩、千枚岩等、10cm～30cm前後の石が混在している。特にチャートや粘板岩等の石は遺跡近隣では殆ど産出しない石であり、意図的に遺跡外から持ち込まれ、壁材等に使用されたものであると考えられる。竪穴は約220×220cmの方形をなし、岩盤を垂直に掘り込む。掘り込みは最大約50cmを測る。床面は岩盤の凹凸面をフラットに整地しており、火を受けて岩盤が赤く変色した箇所が所々に見られる。これは炉跡と考えられ、中心部は長径約130cm、短径約100cmの楕円形状となる。灰層は検出されなかったが、中心部から赤弱→赤強→オリーブ灰色と場所によって変色に差があり、火力の差として考えられる。

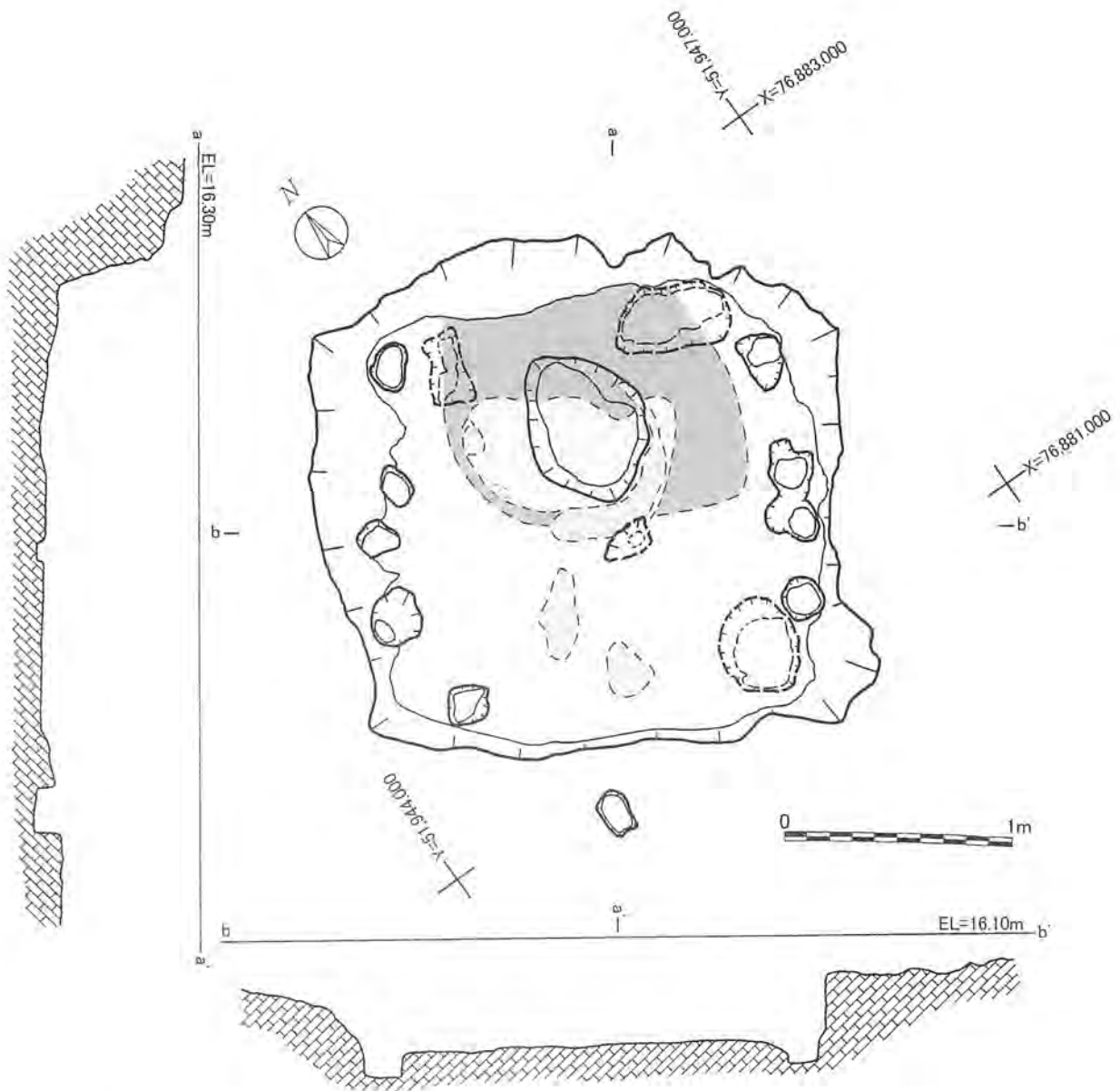
柱穴は掘肩の径が10～15cmで、深さ5～12cmで壁面に沿う形で竪穴内に9箇所確認することができた。また、遺構外に住居跡に関連すると思われる柱穴が1箇所確認されたが機能・用途については不明である。出土遺物として、磨石、石皿、土器口縁部（dot.564）、食料残滓としては貝類（dot.565）、魚骨等が得られた。



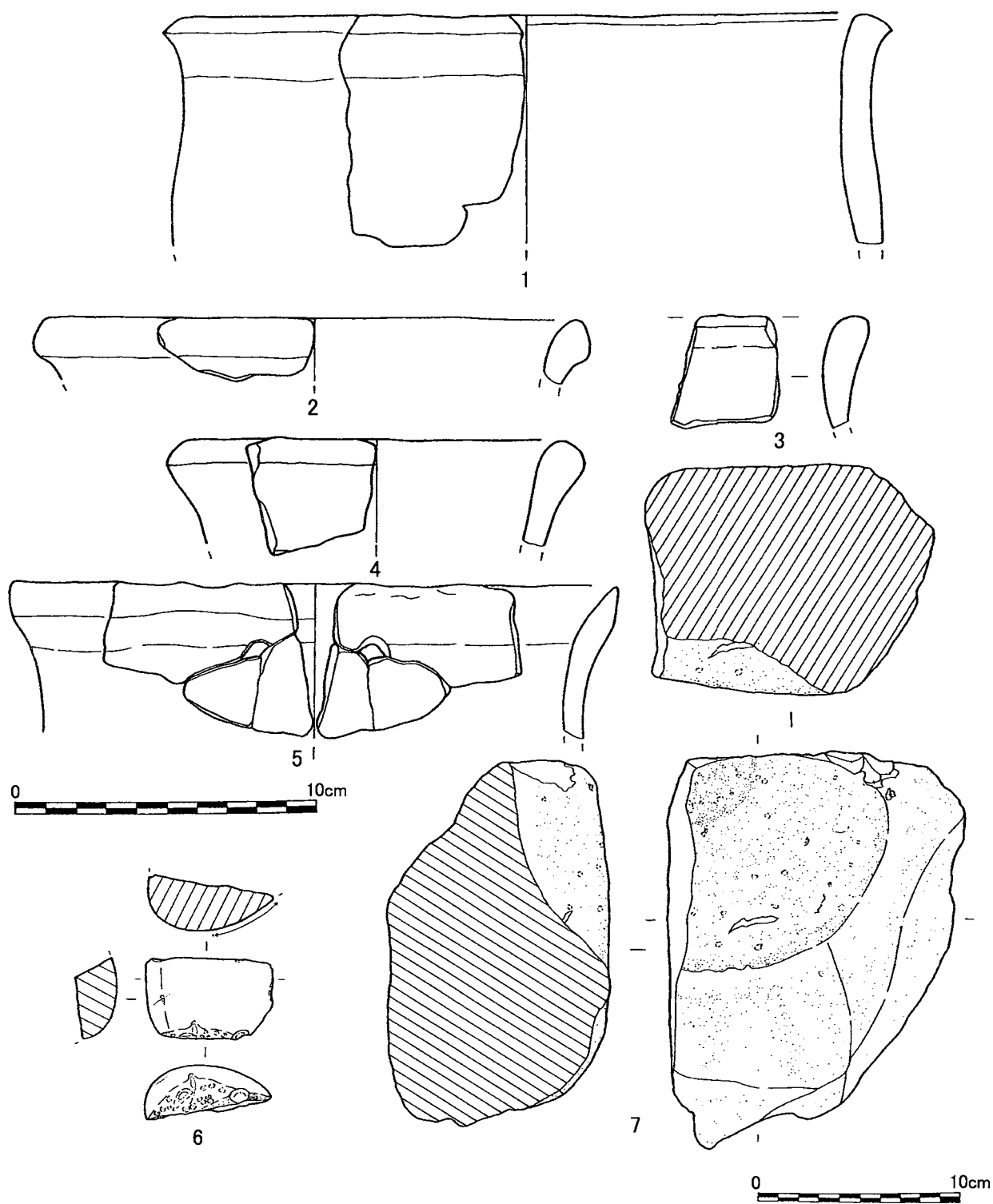
第10図 第2号竪穴住居内覆土礫検出状況

第2号竪穴住居跡の出土遺物（第12図）

第12図の1～4は無文の肥厚口縁で、室川式土器と考えられる。そのうち3、4は緩やかに肥厚し丸みを帯びる。1は口縁部を直線的に立ち上げ若干外反する。器壁は厚い。5は肥厚帯がさほど厚くはなく、口唇で細く仕上げる。頸部には直径約10mmの孔を穿つ。焼成後のもので補修孔とみられる。文様が判然としないが口縁上部に浅い線が観察できる。6の磨石は下端に敲打痕を有する。他は摩滅して滑面となる。残存部の長さ3.9cm、幅6.2cm、厚さ2.2cm、重量75gである。7の石皿は全体的に風化が著しくアバタ状となる。使用面は深く凹む。残存部の長さ14cm、幅18.2cm、厚さ10cm、重量3,400gである。



第11図 第2号竪穴住居跡



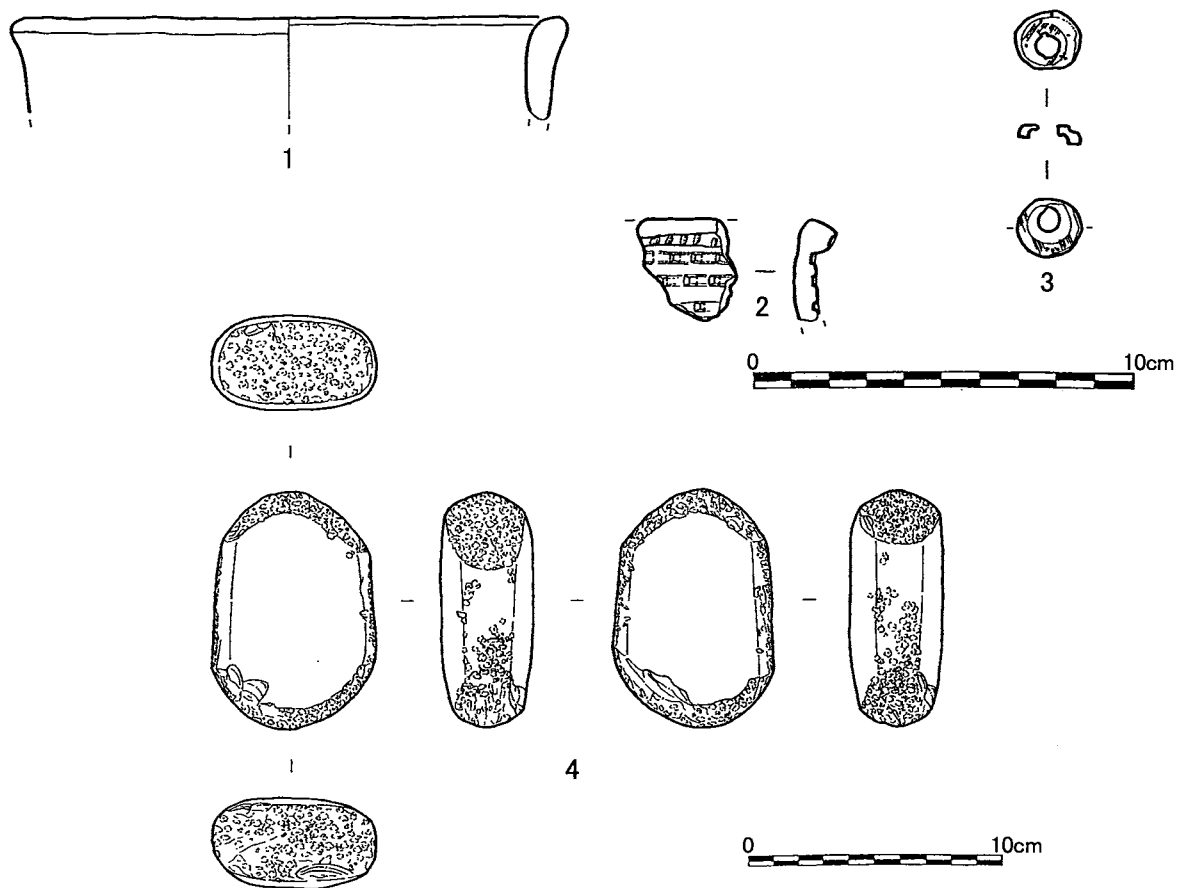
第12図 第2号竖穴住居跡内覆土出土遺物

第3号竪穴住居跡（第14図）

G-20、G-21、H-20、H-21グリッドで検出された。竪穴は約250×230cmの長方形をなし、岩盤を垂直に掘り込む。掘り込みは最大約15cmを測り、掘り込みが目立たない箇所もある。掘り込みが浅い為第Ⅱ層の残っている箇所は数cm程度であった。床面は岩盤の凹凸面をフラットに整地しており、第2号竪穴住居跡と同様に、火を受けて岩盤が赤く変色した箇所が所々に見られる。変色した中央部には若干落ち込みが見られ、そこを炉跡として使用していたと考えられる。長径約130cm、短径約100cmの不定形状となる。灰層は検出されなかった。竪穴内南側では幅約20cm、長さ215cm、深さ約20cmの機能・用途不明の溝状落ち込みが確認された。柱穴は掘肩の径が10～35cmで、深さ1～10cmで壁面に沿う形で竪穴内に6箇所確認することができた。また、遺構外に住居跡と関連すると思われる柱穴が4箇所確認されたが、機能・用途については不明である。出土遺物として、土器、マガキガイ製貝製ビーズ、食料残滓としては貝類、魚骨等が得られた。

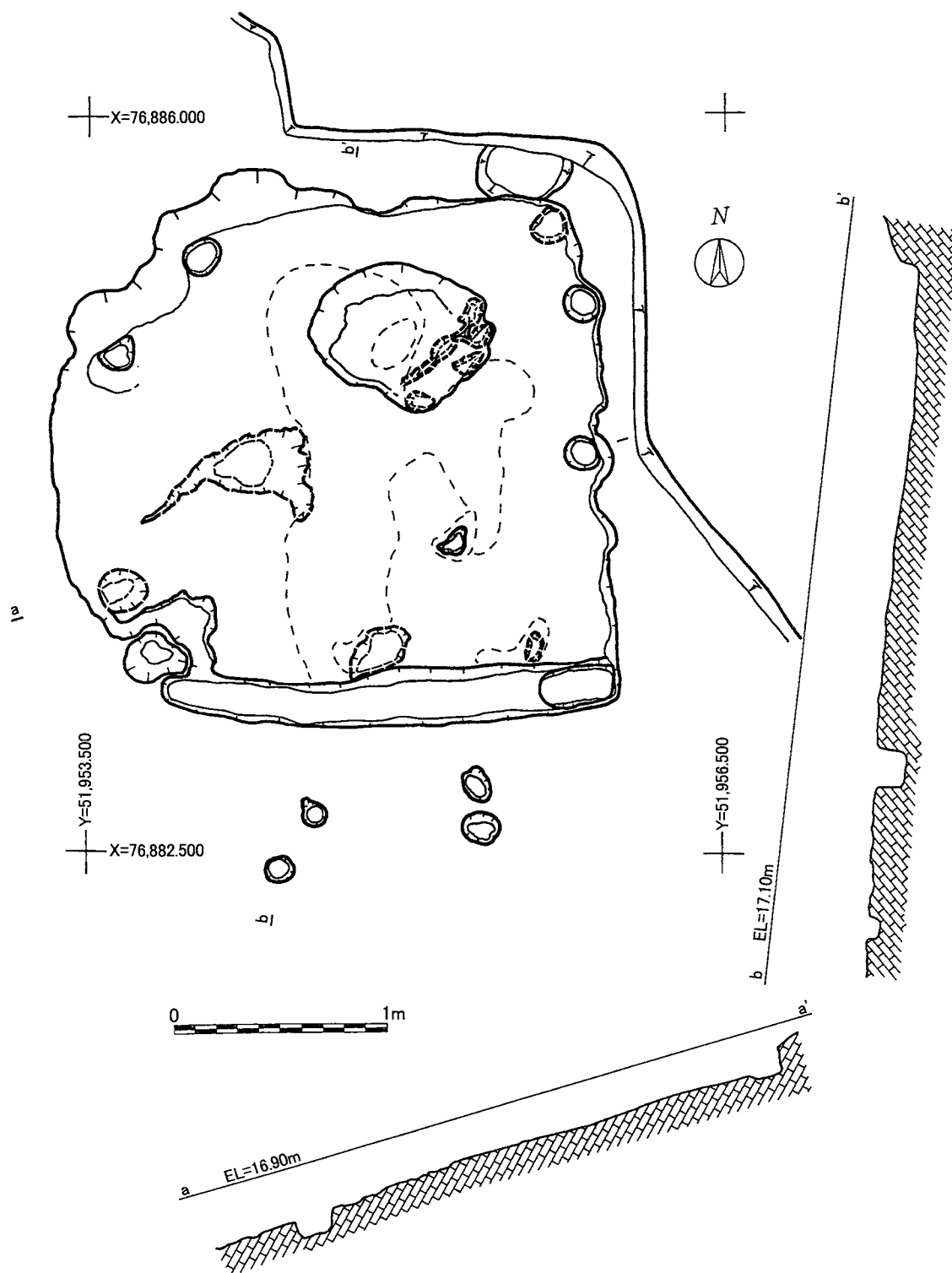
第3号竪穴住居跡の出土遺物（第13図）

第13図1は無文の肥厚口縁。直線的に立ち上がり少し外反する。口縁部は丸くつくる。2は有文の肥厚口縁。口縁上部を篋状工具で押捺し、その下を押し引き文で施文する。3はマ



第13図 第3号竪穴住居内覆土出土遺物

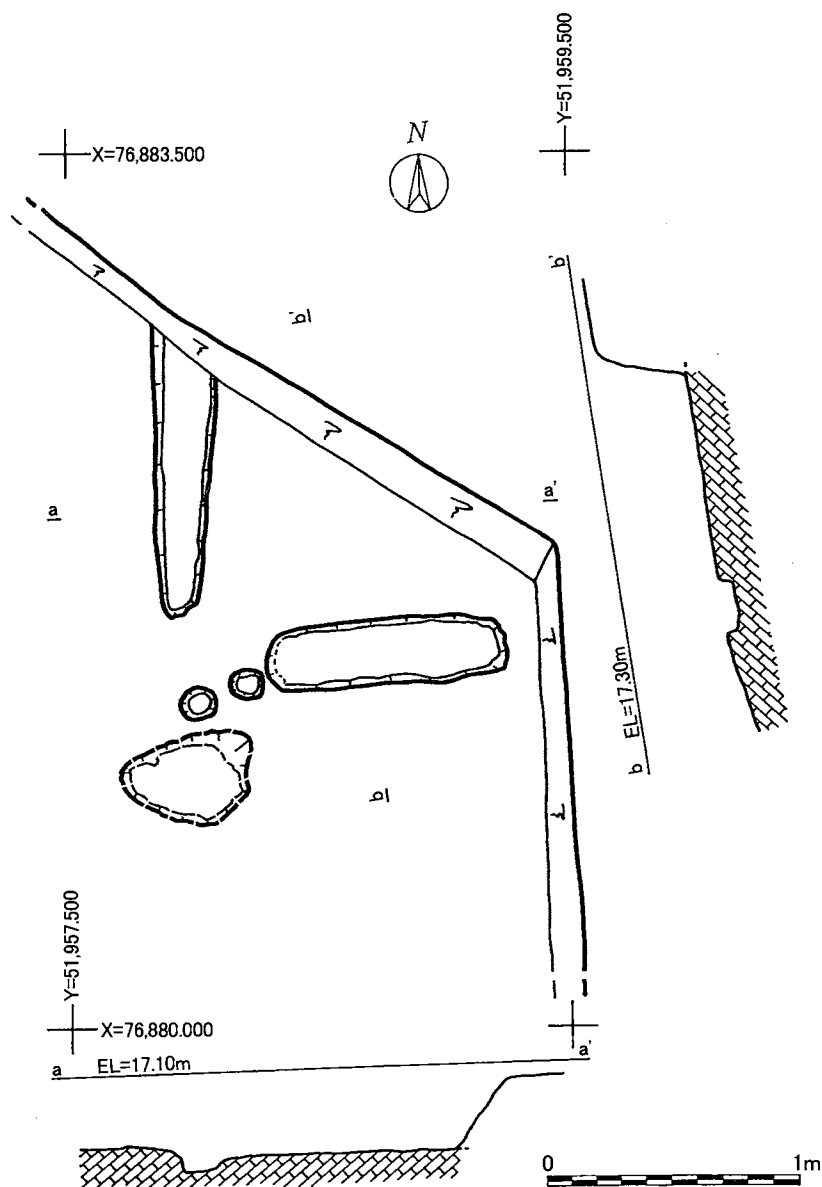
ガキガイ製の貝製ビーズである。5.5mmの孔を穿ち、比較的丁寧な研磨を両面に施す。4の磨石は比較的丁寧に使用され形も安定する。両面滑面となり、上下端及び側面は敲打痕を有する。残存部の長さは9.4cm、幅6.1cm、厚さ2.2cm、重量390gである。



第14図 第3号竪穴住居跡

第 4 号竪穴住居跡（第15図）

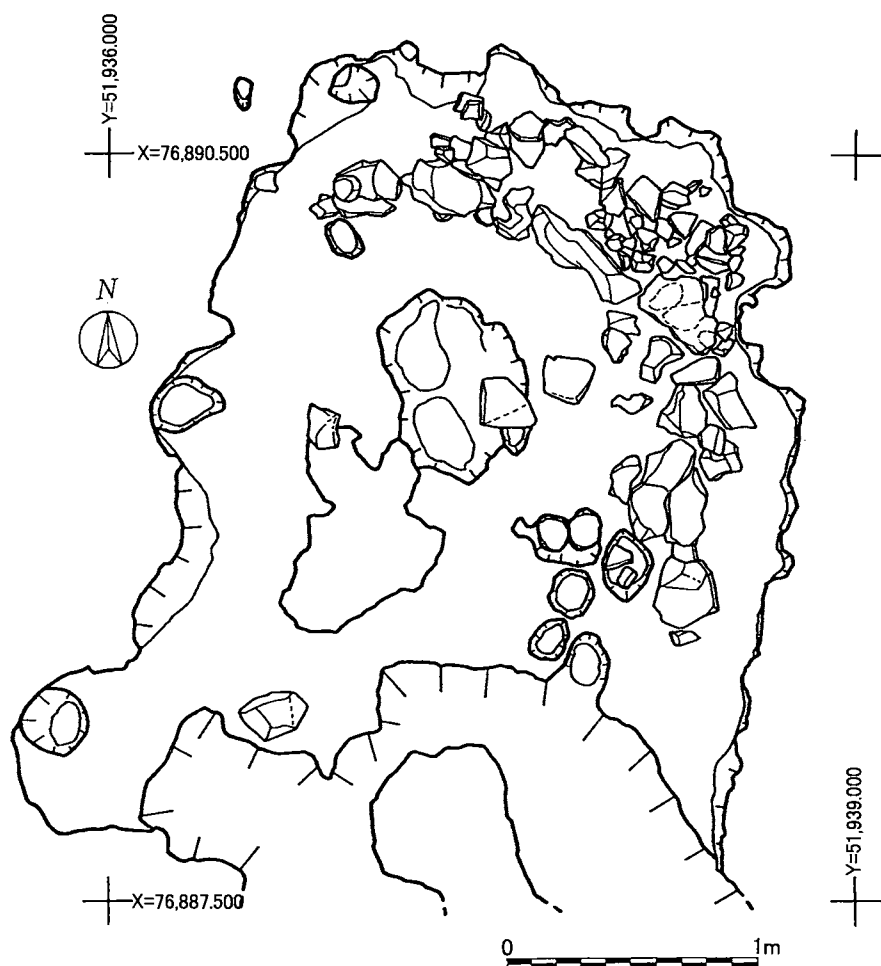
G-21グリッドで検出された。一部は調査区外へのびており、正確なプランは残念ながら確認することができなかった。掘り込みは殆ど目立たないが、床面をフラットに整地していることなどから竪穴住居跡とした。掘り込みが浅い為、第Ⅱ層は確認できなかった。竪穴内南側では幅約20cm、長さ約95cm、深さ約10cm、西側では幅12～25cm、長さ不明、深さ約10cmの機能・用途不明の溝状落ち込みが確認された。柱穴と考えられるpitは2箇所確認されたが、ほかに繋がりそうな柱穴は検出することはできなかった。掘肩の径は約10cm、深さ4～10cmである。火を受けて岩盤が赤く変色した箇所は確認することができなかった。



第15図 第 4 号竪穴住居跡

第5号竪穴住居跡（第16図、第17図）

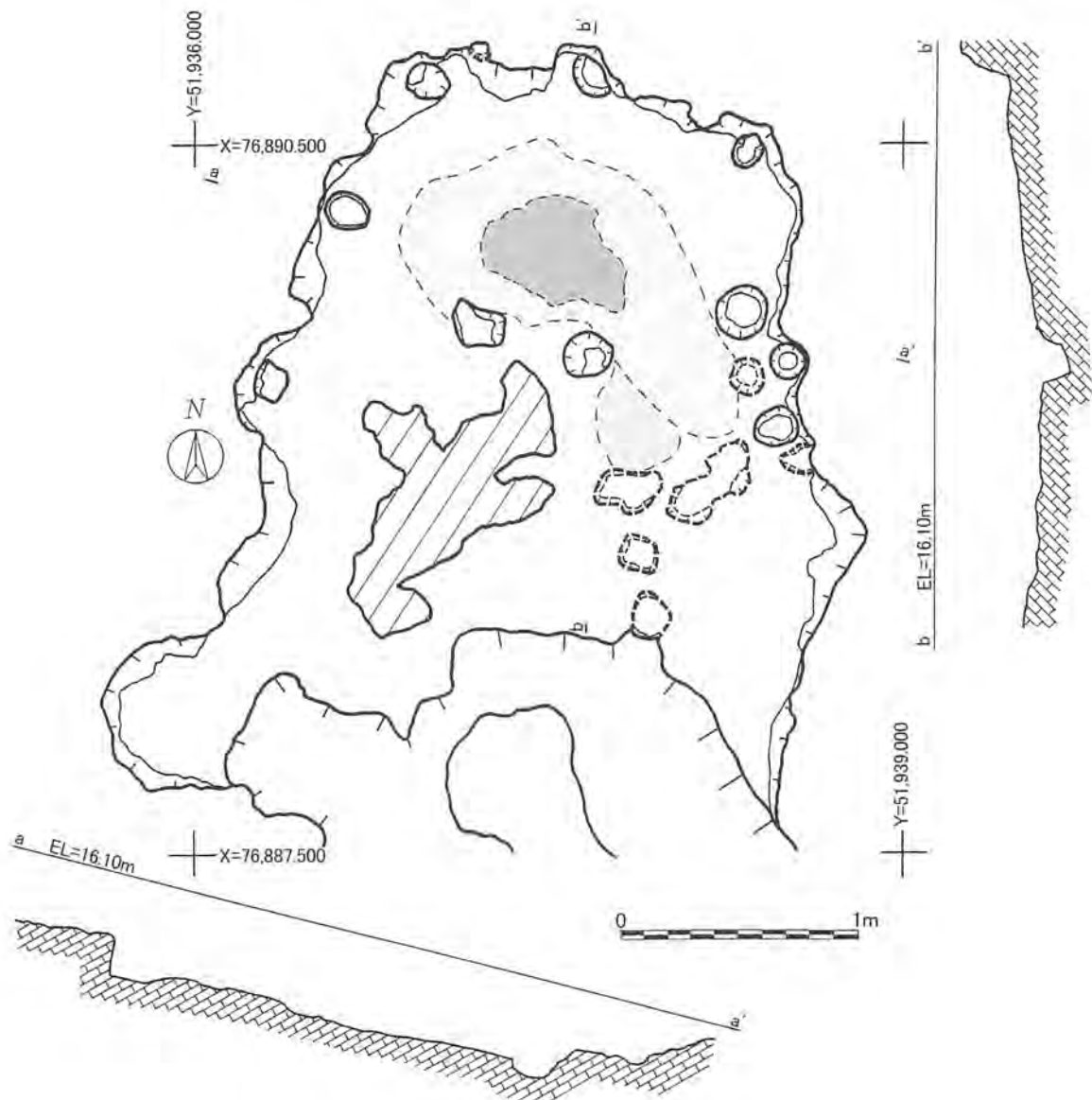
H-17、I-17グリッドで検出された。第2号竪穴住居跡と同様、遺構内から10～30cm大の礫が集中して検出された。これは壁面積み石や敷石が、住居廃棄後覆土に何らかの事情で埋没したものと考えられる。また耕作地であったために何らかの行為によって壊され、遺構内に崩れ落ちたのではないかと考えられる。礫は遺構の北東側半分に集中しており、掘り込みの浅い箇所では検出されなかった。石質は琉球石灰岩を主体に、古生代石灰岩、砂岩、チャート、粘板岩、千枚岩等、直径10cm～30cm前後の石が混在している。特にチャートや粘板岩等の石は遺跡近隣では殆ど産出しない石であり、意図的に遺跡外から持ち込まれ、壁材等に使われたものであると考えられる。竪穴の南側は掘り込みが判然としない為、正確なプランは確認することができなかった。掘り込みは約15cmを測る。床面には火を受けて岩盤が赤く変色した箇所が見られる。これは炉跡と考えられ、不定形状となる。灰層は検出されなかったが、中心部からオリーブ灰色→赤弱→南側一部が赤強、場所によって変色に差があり、火力の差として考えられる。柱穴は掘肩の径が10～20cmで、深さ5～13cm、柱穴は竪穴内には壁面に沿って8箇所、中央部に2箇所確認することができた。出土遺物として、磨石、石皿、土器、食料残滓としては貝類、魚骨等が得られた。



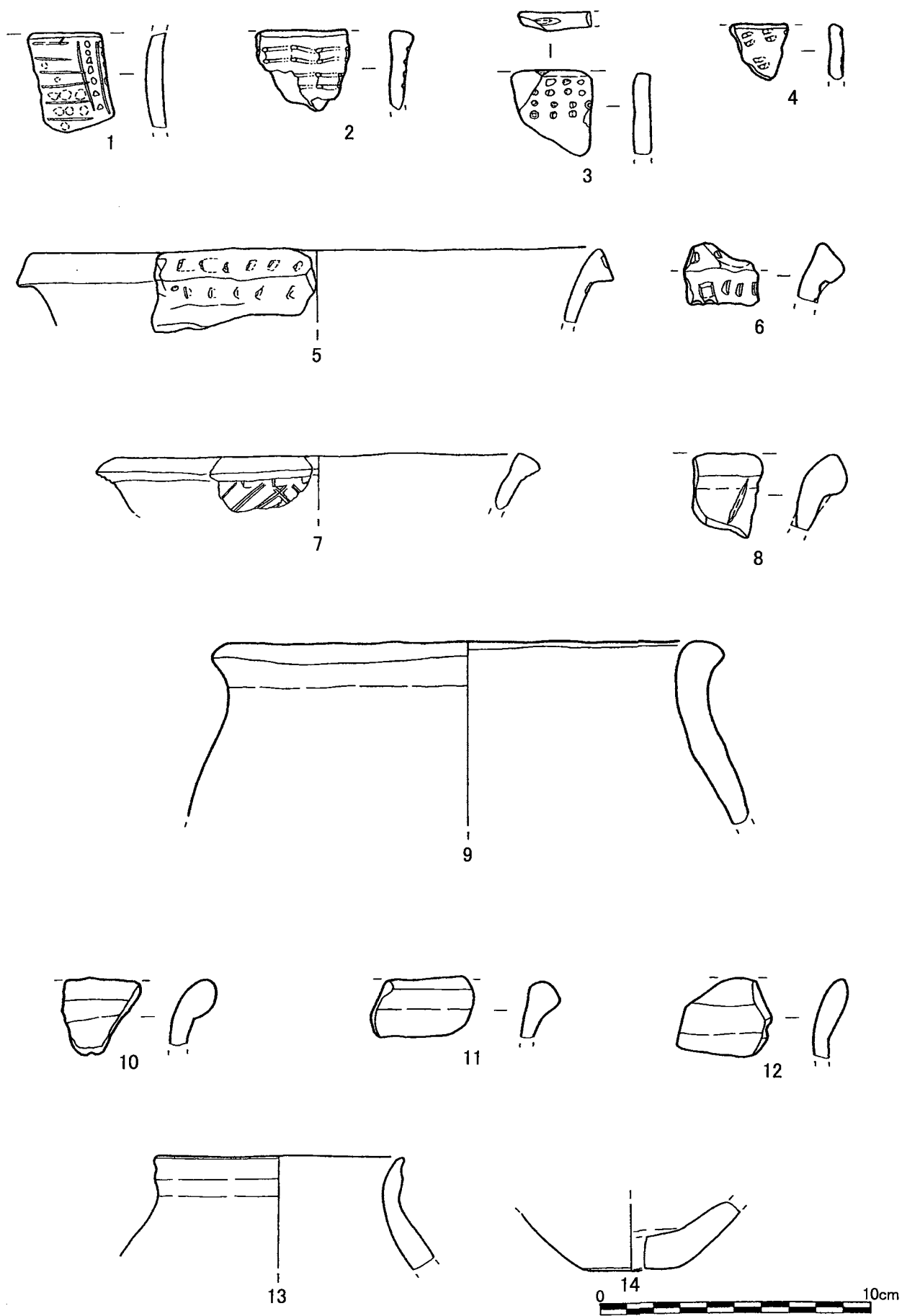
第16図 第5号竪穴住居内覆土礫検出状況

第5号竪穴住居跡の出土遺物（第18図、第19図）

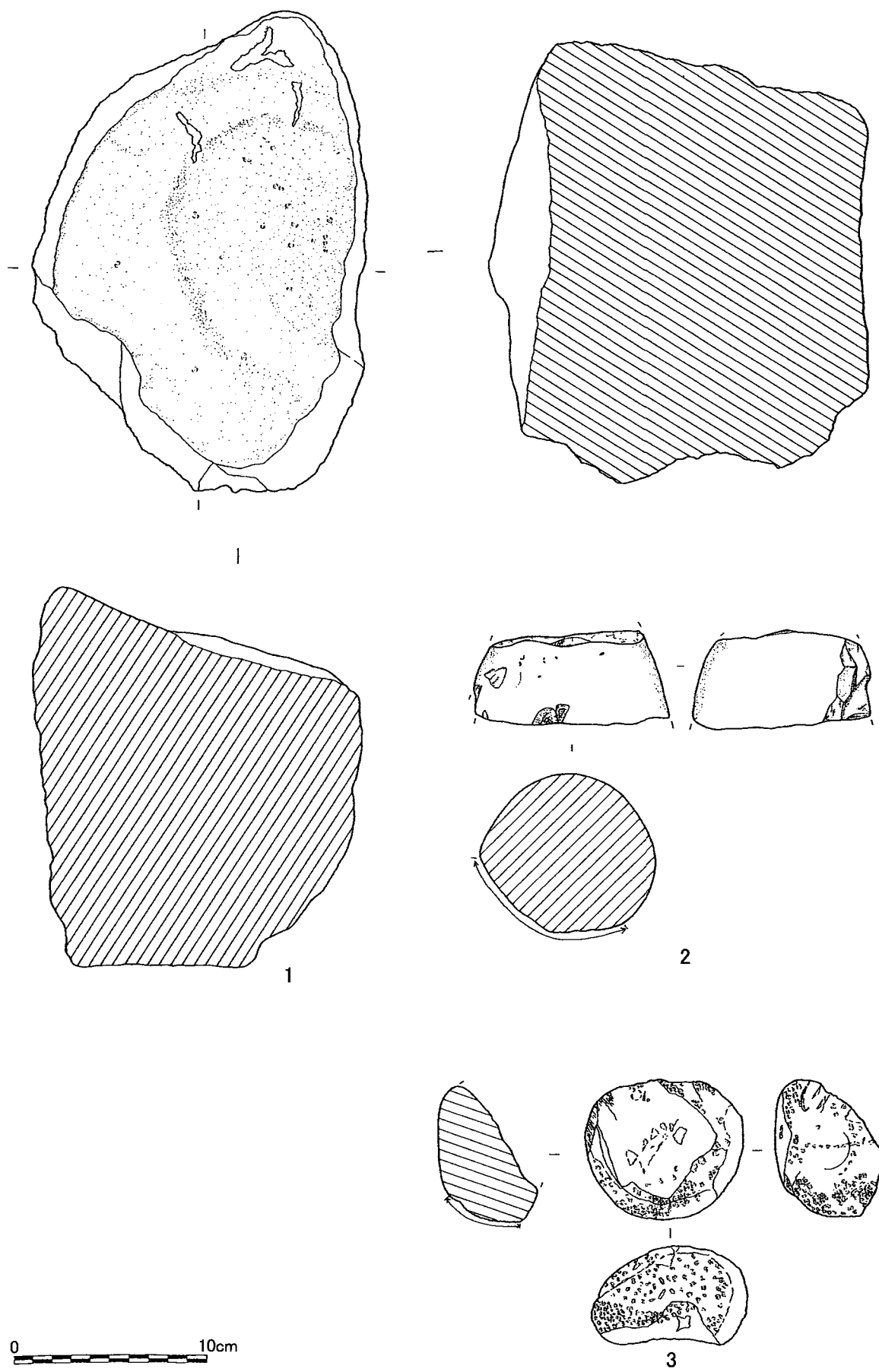
第18図1は有文の胴部。文様は細沈線を縦位、横位に区画し、その中を棒状工具で押捺する。しかし摩耗して文様は判然としない。2～4は萩堂式土器と思われる土器で、2、4は叉状工具による押し引き文を並列して施す。3は口唇部を棒状工具で押捺し、口唇直下は叉状工具で点刻する。5、6は口唇部及び口唇直下に篋状工具による比較的雑な押し引き文を施す。7は口縁上部を篋状工具で押し引きし、その直下を棒状工具で鋸歯文状に仕上げる。8は先端の尖った棒状工具で深く施文する。5～7、9は断面が三角形状になり、8、10、11は丸みを帯びる。9～12は無文の肥厚口縁である。12は無文の肥厚口縁で肥厚帯が縦に長くなる。13は型式不明の壺形土器で、口縁部は肥厚せずつまみ上げるように細く仕上げる。第19図1の石皿は全体的に風化が著しくアバタ状となる。使用面は浅く凹む。2の磨石は上部及び下部の殆どを失う欠損品である。側面部は摩滅して滑面となる。3の磨石は側面部全体に敲打痕が集中する。裏面に一部研磨痕が残る。



第17図 第5号竪穴住居跡



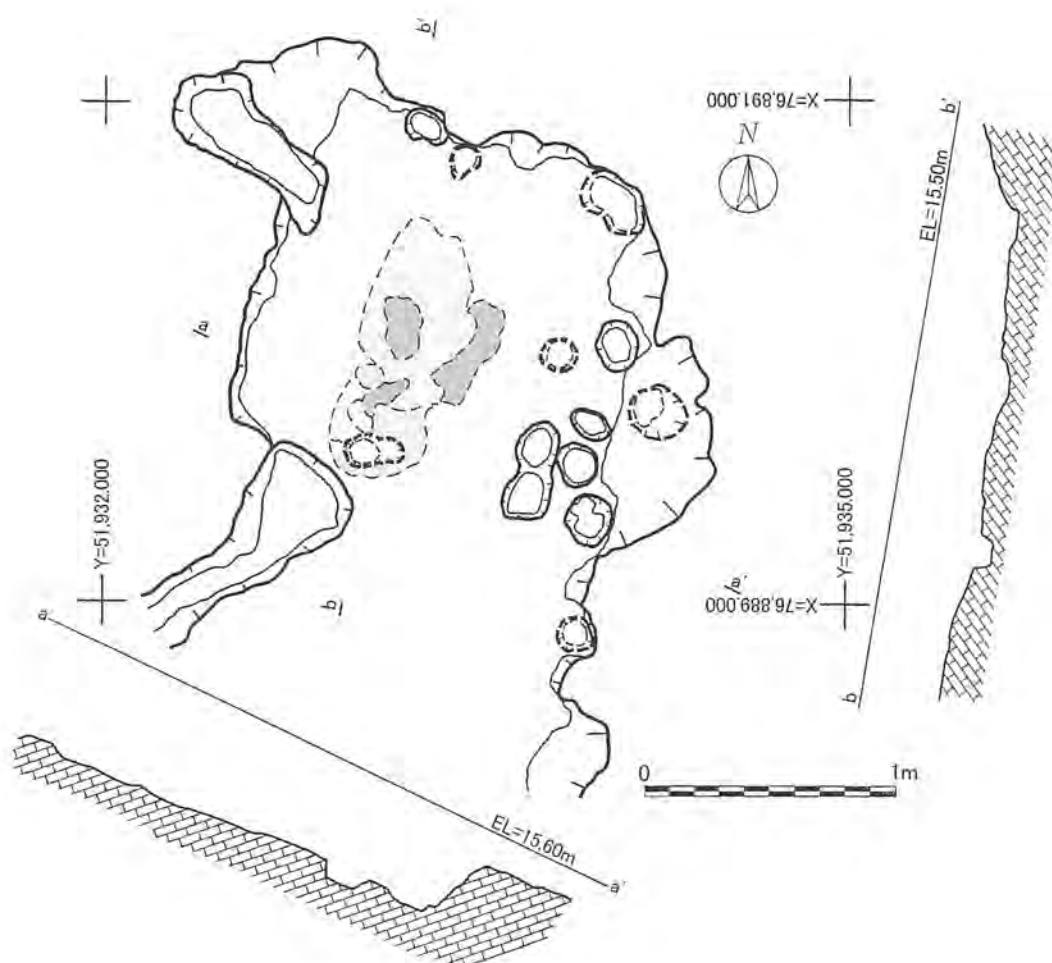
第18図 第5号豎穴住居内覆土出土遺物



第19図 第5号竪穴住居内覆土出土遺物

第6号竪穴住居跡（第20図）

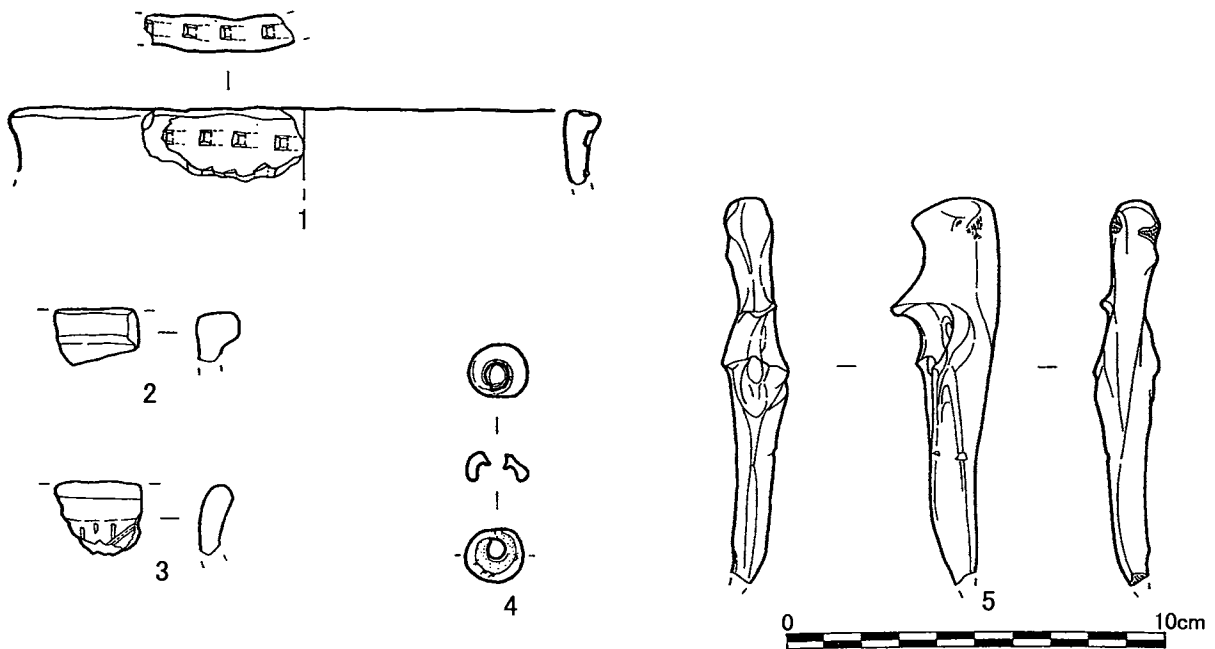
H-16、I-16グリッドで検出された。竪穴の南側の一部は掘り込みが判然としないが、約150×150cmの方形が想定できる。掘り込みは浅い。床面には火受しており岩盤が赤く変色した箇所が見られる。これは炉跡と考えられ、長径約100cm、短径約50cmの楕円形状となる。灰層は検出されなかった。柱穴は掘肩の径が10～15cmで、深さ2～13cmで竪穴内に8箇所確認することができた。出土遺物として、骨錐、貝珠、室川式土器（dot.611）等が得られた。



第20図 第6号竪穴住居跡

第 6 号 竪穴住居跡の出土遺物（第21図）

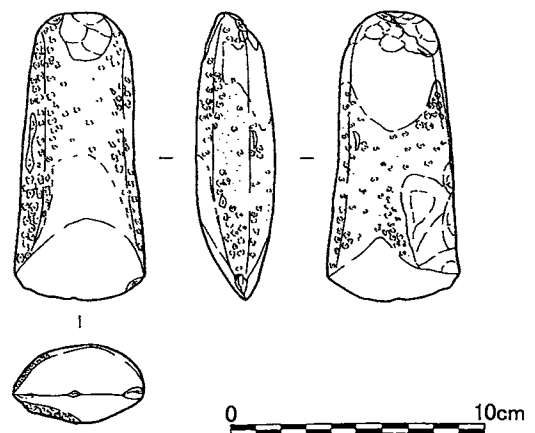
第21図 1 は有文の肥厚口縁。肥厚部分は雑に仕上げる。口唇部及び口唇直下に篋状工具で押し引き文を施す。2 は無文の肥厚口縁。口唇部を水平に仕上げる。3 はさほど肥厚しない有文の口縁で、篋状工具による押し引き文、その文様帯に斜沈線を施す。4 はマガキガイ製のビーズである。両面を研磨するが、雑な成形に加え表裏共に風化しており、研磨面は判然としない。5 はイノシシの尺骨を用いた骨錐で、先端部は欠損しているものの側面部を斜位にカットし、研磨して尖らす。残存部の最大長は10.3cm、最大幅2.7cmを計る。



第21図 第 6 号 竪穴住居内覆土出土遺物

竪穴住居跡以外の出土遺物（第22図）

竪穴住居跡以外の調査区では遺物包含層は検出されていない。よって今回の調査で得られた表採石斧 1 点だけを報告する。第22図はバチ形の両刃磨製石斧で、基部が一部破損するがほぼ完全な形で残る。片側側面部と刃部に丁寧な研磨を施し、表面は敲打痕が全体にみられる。また基部中位は少しだけ凹む。これは柄を装着した際の痕と思われる。長さは11.4cm、幅5.1cm、厚さ3cm、重量240gである。



第22図 竪穴住居跡以外の出土遺物

第1表 平成15年度本調査出土土器

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	分類	部位	計測値(cm)		焼成	色調	混入物	観察	遺構
				口径	底径					
第8図1 図版17-1	G-18 Ⅱ dot.36	カヤウチ バンタ	口縁部	—	—	良好	暗赤褐色	微細な石英を多量に混入	無文の肥厚口縁で、肥厚帯のみの資料。	第1号
第8図2 図版17-2	G-18 Ⅱ dot.278	カヤウチ バンタ	口縁部	—	—	良好	鈍い 赤褐色	微砂粒、石英を多量に混入、雲母を少量混入	無文の肥厚口縁。丁寧に成形する。外面にナデ。	第1号
第8図3 図版17-3	G-18 Ⅱ dot.21	喜念Ⅰ	口縁部	7.2	—	堅緻	暗赤褐色	微砂粒、石英、雲母を多量に混入	口縁部は肥厚し頸部に沈線文を施す。	第1号
第12図1 図版18-1	G-18.19 Ⅱ dot.437	室川	口縁部	24.2	—	堅緻	明赤褐色	微砂粒、チャートを多量に混入、石英を少量混入	無文の肥厚口縁。直線的に立ち上がり、口縁上部で少し外反する。	第2号
第12図2 図版18-2	G-19 Ⅱ dot.259	宇佐浜	口縁部	17.2	—	良好	赤褐色	微砂粒、石英を多量に混入	無文の肥厚口縁。	第2号
第12図3 図版18-3	G-18.19 Ⅱ dot.531	室川	口縁部	—	—	良好	橙色	微砂粒を多量に混入、石英を少量混入	無文の肥厚口縁。さほど外反せず肥厚帯も緩やかに膨らむ。器表面は若干風化する。	第2号
第12図4 図版18-4	G-18.19 Ⅱ dot.532	室川	口縁部	12.2	—	良好	橙色	微砂粒、石英、チャートを少量混入	無文の肥厚口縁。	第2号
第12図5 図版18-5	G-18.19 Ⅱ dot.564	宇佐浜	口縁部	20.0	—	堅緻	橙色	微砂粒、石英、チャートを少量混入	無文の肥厚口縁。頸部に直径約10mmの孔を穿つ。焼成後のもので補修孔とみられる。両面ナデ顕著。文様か判然としないが口縁上部に浅い線が見られる。	第2号
第13図1 図版20-1	G-20 Ⅱ dot.395	室川	口縁部	14.2	—	良好	赤褐色	微砂粒、石英、チャートを多量に混入	無文の肥厚口縁。直線的に立ち上がり、口縁上部で少し外反する。	第3号
第13図2 図版20-2	G-20 Ⅱ dot.484	室川	口縁部	—	—	良好	赤褐色	微砂粒を多量に混入、チャートを少量混入	有文の肥厚口縁。口縁上部を篋状工具で押捺し、その下を押し引き文で施文する。	第3号
第18図1 図版21-1	H-17 Ⅱ dot.205	伊波	口縁部	—	—	良好	橙色	微砂粒、石英を多量に混入、雲母を少量混入	口縁部は直線的に立ち上がる。文様は細沈線を縦位、横位に区画し、その中を棒状工具で押捺。しかし摩耗して文様は判然としない。	第5号
第18図2 図版21-2	H-17 Ⅱ dot.170	荻堂	口縁部	—	—	良好	暗赤褐色	微砂粒、石英を多量に混入	直線的に立ち上がる有文の肥厚口縁。又状工具による押し引き文を2条施す。	第5号
第18図3 図版21-3	H-17 Ⅱ dot.554	荻堂	口縁部	—	—	良好	赤褐色	微砂粒、石英を多量に混入	口縁部は直線的に立ち上がる。文様は口唇部を棒状工具で押捺し、口唇直下は又状工具で点刻する。	第5号
第18図4 図版21-4	I-17 Ⅱ dot.489	荻堂	口縁部	—	—	良好	赤褐色	微砂粒、石英を多量に混入	口縁部は直線的に立ち上がり又状工具による押し引き文を並列して施す。	第5号
第18図5 図版21-5	H-17 Ⅱ dot.336	室川	口縁部	21.0	—	良好	明赤褐色	微砂粒、石英、チャートを多量に混入	有文の肥厚口縁。口縁部は内傾し口唇部を水平に仕上げる。口唇部とその直下には篋状工具による雑な押し引き文を施す。	第5号
第18図6 図版21-6	H-17 Ⅱ dot.230	荻堂	口縁部	—	—	良好	明赤褐色	微砂粒、石英を多量に混入	有文の肥厚口縁。つくりは雑。口唇部及び口唇直下に篋状工具による押し引き文を施す。	第5号
第18図7 図版21-7	H-17 Ⅱ dot.594	室川	口縁部	15.0	—	堅緻	明赤褐色	微砂粒、石英を多量に混入	有文の肥厚口縁。口縁部上部を篋状工具で押し引きし、その直下を棒状工具で折帯文状に仕上げる。	第5号
第18図8 図版21-8	H-17 Ⅱ dot.356	宇佐浜	口縁部	—	—	良好	明褐色	微砂粒、石英を多量に混入、雲母を少量混入	有文の肥厚口縁。先端の尖った棒状工具で深く施文する。	第5号
第18図9 図版21-9	H-17 Ⅱ dot.196	室川	口縁部	18.4	—	堅緻	明赤褐色	微砂粒、石英を多量に混入	無文の肥厚口縁。	第5号
第18図10 図版21-10	H-17 Ⅱ dot.224	室川	口縁部	—	—	良好	橙色	微砂粒、石英を混入	無文の肥厚口縁。	第5号
第18図11 図版21-11	H-17 Ⅱ dot.341	室川	口縁部	—	—	堅緻	橙色	微砂粒、石英、チャートを多量に混入	無文の肥厚口縁。	第5号
第18図12 図版21-12	H-17 Ⅱ dot.210	宇佐浜	口縁部	—	—	堅緻	鈍い 赤褐色	微砂粒、石英を多量に混入	無文の肥厚口縁。	第5号
第18図13 図版21-13	H-17 Ⅱ dot.216	不明	壺 口縁部	9.0	—	良好	表：鈍い 黄褐色 裏：鈍い 黄褐色	微砂粒、チャートを多量に混入	無文の肥厚口縁。つまみあげるように口唇部を細く仕上げる。	第5号
第18図14 図版21-14	H-17 Ⅱ dot.546	荻堂	底部	—	3.6	良好	橙色	微砂粒、石英、チャートを多量に混入	平底。	第5号
第21図1 図版23-1	H-16 Ⅱ dot.611	室川	口縁部	15.6	—	堅緻	赤褐色	粗い砂粒、石英を多量に混入	有文の肥厚口縁。肥厚部分は雑に仕上げる。口唇部及び口唇直下に篋状工具で押し引き文を施す。	第6号
第21図2 図版23-2	H-16 Ⅱ dot.611	室川	口縁部	—	—	良好	褐色	微砂粒、石英、雲母を多量に混入	無文の肥厚口縁。口唇部を水平に仕上げる。	第6号
第21図3 図版23-3	H-16 Ⅱ	室川	口縁部	—	—	良好	明赤褐色	微砂粒、石英、チャートを多量に混入	有文の肥厚口縁。篋状工具による押し引き文、その文様帯に斜沈線文を施す。	第6号

第2表 平成15年度本調査出土石器

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	器種	方量 (cm・g)				観察	遺構
			長さ	幅	厚さ	重量		
第8図4 図版17-4	G-18 Ⅲdot.20	敲石	10.2	5.4	5.5	320	全体の約半分を欠く。各面ともに研磨面で、上下端に敲打痕が集中する。	第1号
第12図6 図版18-6	G-18.19 Ⅱ	磨石	3.9	6.2	2.2	75	欠損品。下端には敲打痕。他は摩滅して滑面となる。	第2号
第12図7 図版18-7	G-18.19 Ⅱdot.441	石皿	14.0	18.2	10	3,400	欠損品。全体的に風化が著しくアバタ状となる。使用面は深く凹む。	第2号
第13図4 図版20-4	G-20 Ⅱdot.507	磨石	9.4	6.1	3.6	390	比較的丁寧な使用され形も安定する。両面滑面となり、上下側面は敲打痕。	第3号
第19図1 図版22-1	H-17 Ⅱdot.466	石皿	23.0	16.9	16.2	3,720	下部分が剥離する。摩滅しており全体的に滑面となる。	第5号
第19図2 図版22-2	H-17 Ⅱ	磨石	4.7	9.1	8.3	610	上部及び下部の殆どを失う欠損品。側面部は摩滅して滑面となる。	第5号
第19図3 図版22-3	H-17 Ⅱ	磨石	8.2	7.1	4.0	425	欠損品。側面部全体に敲打痕が集中する。裏面に研磨痕。	第5号
第22図 図版24	表採	石斧	11.4	5.1	3.0	240	バチ形の両刃磨製石斧。	第2号

第3表 平成15年度本調査出土骨製品

単位：cm

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	素材	残存状況	最大長	最大幅	加工状況	遺構
第21図5 図版23-5	I-16 Ⅱdot.578	イノシシ 右尺骨	先端部欠損	10.3	2.7	右尺骨の先端部約1/3を研磨している。欠損しているが側面部を斜位にカット、研磨し尖らす。	6号

第4表 平成15年度本調査出土貝製品

単位：mm

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	貝種	殻径	最大厚	孔径	重量 (g)	所見	遺構
第13図3 図版20-3	G-20 Ⅱ (遺構内)	マガキガイ	1.6×1.7	0.50	0.55	1.49	比較的丁寧な研磨を両面に施す。	3号
第21図4 図版23-4	H-16 Ⅰ	マガキガイ	1.4×1.5	0.75	0.60	1.74	両面研磨。雑な成形で表裏風化していて研磨面は判然としない。	6号

小 結

第1号竪穴住居跡は一部が調査区外へ延び、正確なプランは確認することができなかった。竪穴は浅く不明瞭であるが、床面の火受から竪穴住居跡とした。火受けは炉跡と考えられ不定形である。柱穴は浅く小さいが6箇所確認された。規則性に乏しいが、四隅に設けられると考える。第2号竪穴住居跡は今回確認された6基の住居跡の中で最も残りのよい住居跡である。遺構内覆土からは拳大の礫が集中して検出された。礫は掘り込みの深い北東側に集中し浅い箇所では検出されなかった。これらの礫が遺跡近隣では産出しないことを考えれば遺跡外からの持ち込みであることが言える。竪穴の規模は約220×220cmの正方形で、床面は岩盤の凹凸がほとんど無い。第1号同様床面が赤色に変色し100cm前後の楕円形に広がる。竪穴内には9箇所の柱穴を認めることができ、いずれも壁沿いに並列する。また、遺構外には住居跡と関連すると思われる柱穴が1箇所確認された。第3号竪穴住居跡は約250×230cmの方形をなす。掘り込みは最大約15cmと比較的浅いが、床面は丁寧に造られ岩盤の凹凸は目立たない。第2号竪穴同様、床面には火受けが見られ、中央部は若干落ち込むことから、これを炉跡と推定した。炉跡は約100cmの略方形となる。本遺構で特筆されるものに、竪穴内南側で確認された幅約20cmの溝状落ち込みがある。シヌグ堂遺跡（金武ほか1985）ではいわゆる壁面化粧とする石積みを竪穴の壁面に配置するが、あるいはこの化粧壁の石積みを失ったものとも考えられる。第2号竪穴住居同様壁面に沿って竪穴内に6箇所確認する

ことができた。また、遺構外には住居跡と関連すると思われる柱穴が4箇所確認されている。第2・3号で確認される遺構外の柱穴は遺構の自然地形では低いところにあたり、なおかつ高低を略南北とすると、東西に柱穴が配置される点からも住居入口部分に設けられたなんらかの遺構と考えられる。第4号竪穴住居跡は一部は調査区外へのびているため、正確なプランは確認することができなかった。竪穴は浅いが床面の様子から竪穴住居跡とした。第5号竪穴住居跡は2号同様、遺構内から10～30cm大の礫が集中して検出された。南側の掘り込みは判然としない為、正確なプランは確認することができなかったが、壁面に沿って8箇所、中央部に2箇所確認されている。第6号竪穴住居跡は約150×150cmの正方形と想定される。床面には火受けした岩盤が赤変する。竪穴内には8箇所柱穴が確認されている。遺物は第5表に示すような各型式の土器が得られている。いずれも小破片のため型式の判断ができたものは僅かである。口縁部の破片数では室川式が主体となることが分かる。数点だが萩堂式や宇佐浜式などを伴う。遺構の年代を遺物の出土数の少ない4・6号の検討を保留すれば、2・3号は室川式を主体とする住居跡と推測され、1号はやや新しい時期のものと推測される。5号に関しては住居跡かの判断も難しいことや時期を前後する遺物も多く含むことから検討は保留する。総じて室川期の2・3号住居跡と、これに若干後続する時期の1号住居が確認されたという点が本調査の大きな成果である。

第5表 平成15年度本調査出土遺物分類表

出土地点 出土遺物			Ⅱ 層							Ⅰ 層	表 採	合 計
			第1号住居跡	第2号住居跡	第3号住居跡	第4号住居跡	第5号住居跡	第6号住居跡	遺構外			
土器	伊波式	口縁部					1					1
	萩堂式	口縁部					3					3
		胴部							1			1
	室川式(無文)	口縁部	1	5	5		15	1		7		34
	室川式(有文)	口縁部			1		4					5
	宇佐浜	口縁部	1		1		5					7
	カヤウチバンタ	口縁部	2									2
	喜念Ⅰ式	口縁部	1									1
		胴部										
	型式不明	口縁部					1			1		2
	型式不明(有文)	胴部		1	2		8	1		4		16
	型式不明	胴部	146	297	310		581	170		761		2,265
	型式不明	底部					1					1
石器	石斧										1	1
	叩石		1	1	2		2			1		7
	磨石			1	2		2			2		7
	石皿			1			1					2
		小破片					30					30
骨製品	骨針							1				1
貝製品	貝製ビーズ				1			1				2
			152	306	324	0	654	174	1	776	1	2,388

第V章 これまでの調査

本項で報告する資料は昭和56年度～58年度に遺跡の分布調査（上原1984）、及び平成13年度に文化庁の補助事業として実施した村内遺跡発掘調査事業によって得られたものである。

古宇利架橋建設事業に伴い、取り付け道路の新設・改良工事等の諸開発によって埋蔵文化財をはじめとした諸種の文化財の調整が増加している。村道では古宇利横田原線道路改良工事によって古宇利原B遺跡が、県道では古宇利大橋橋梁整備事業に伴う取り付け道路の整備事業が計画され、古宇利原B遺跡の近傍と古宇利原A遺跡の地域において開発計画が立てられていた。このため今帰仁村では開発の事前調整に資することを目的の一つとして村内遺跡発掘調査事業を実施した。同調査は主に古宇利原A遺跡、古宇利原B遺跡、横田原に所在する古墓群の分布調査と、今後架橋建設に伴い家屋等の建築が増えた場合に迅速に開発調整が行えるように島内の遺跡分布調査も併せて実施した。具体的には既に事業計画のある地域一帯を調査範囲として試掘調査を行った。古宇利原B遺跡については第23図のと通りの試掘調査を行った。

平成13年9月18日より平成13年9月21日までの期間、古宇利原B遺跡のT.P.1～T.P.3の調査を実施した。調査期間中は雨天が続いたこともあって作業は思うように進めることができなかった。調査の結果、台地縁辺部であるということもあって包含層は認められるものの、遺物はほとんど出土しなかった。次に平成13年11月19日より平成13年11月30日までの期間、古宇利原A遺跡のT.P.1～T.P.4の調査を実施した。調査には地権者の方から了承を得て3地点において実施し、このなかT.P.2では厚い堆積の包含層を認めることができた。平成13年11月19日から平成13年11月30日の期間に古宇利原B遺跡のT.P.4～T.P.10の調査を継続実施した。この結果、包含層の厚く堆積したT.P.4以外はどの地点も包含層は薄く出土量も少ないことが確認された。しかし、T.P.8などでは遺構と思われる岩盤の窪みなどから土器が出土するなどの成果が得られている。また、T.P.4については旧水路沿いにあることから水の流路があり、耕作土の薄い石灰岩台地上の古宇利島にあっては比較的厚い土を堆積する地点であることが推測された。

この結果を平成13年今教社文第208号において、沖縄県土木事務所と調整し道路工事等の開発にあたっては事前調整を求め、平成14年度道路建設等においては古宇利原A遺跡の保存に努めるように調整を行った。調整の結果、古宇利原A遺跡は平成14年度から平成16年度に記録保存調査を行うことで協議し、古宇利原B遺跡については平成15年度に記録保存調査を行うことで協定書を締結した。後者の記録保存調査が本報告書にあたる。

さて、古宇利原B遺跡について村が主体的に行った調査はこれまで述べてきたように平成15年度の記録保存を目的とする緊急発掘調査のほか、平成13年度の試掘調査、昭和56～58年度の分布調査があることになる。分布調査採集資料については発掘調査によるものではないが多量の遺物が採集されている。平成13年度以来実施してきた調査結果と若干異なる印象の遺物で構成されており、本遺跡を理解する上で大変興味深い。このため以前の報告では写真のみの掲載であったが、今回はこれを図化し遺跡理解の一助とした。

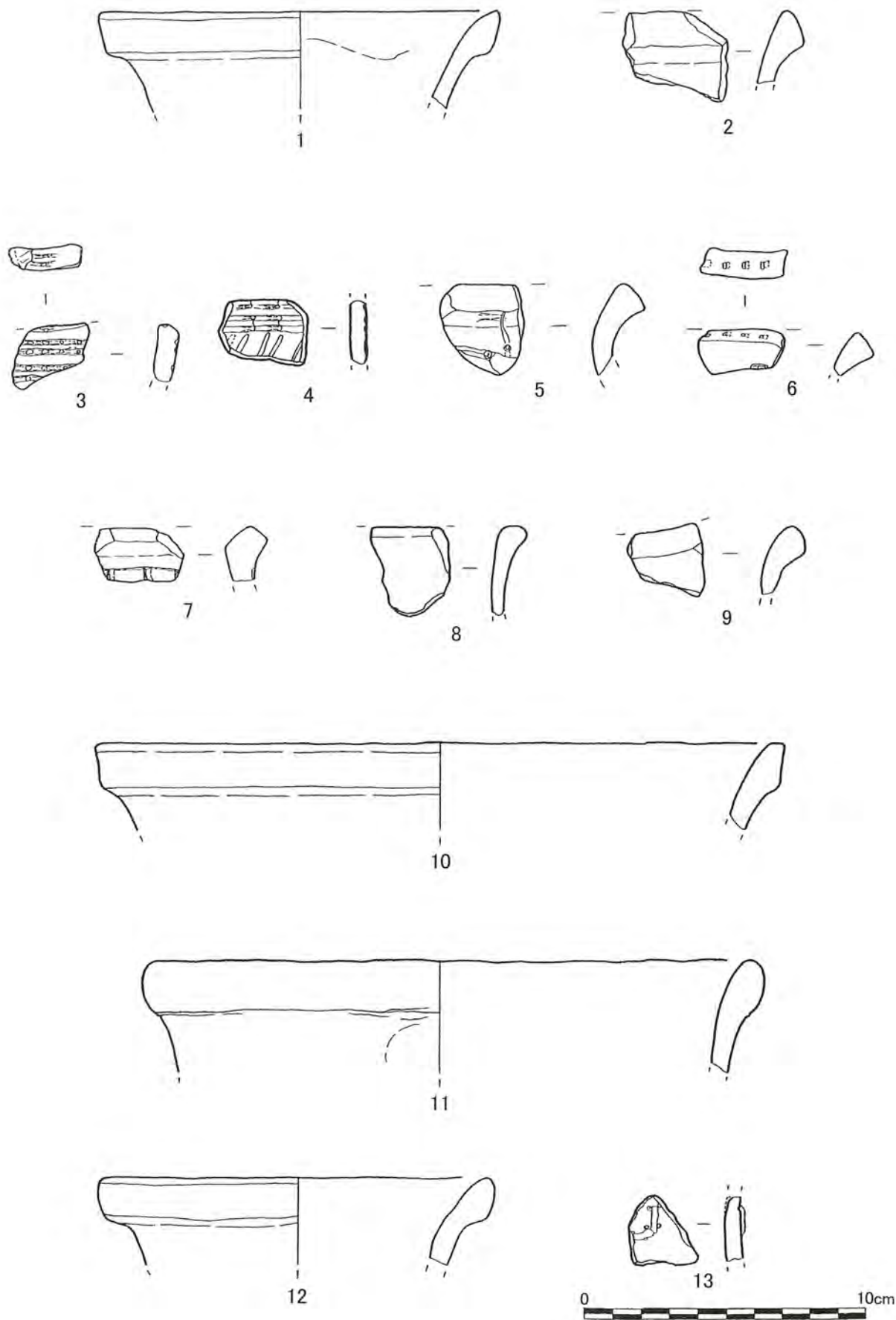
試掘調査資料では特に包含層が厚く堆積し、かつ出土遺物もまとまった形で出土したT.P.4を中心に報告する。



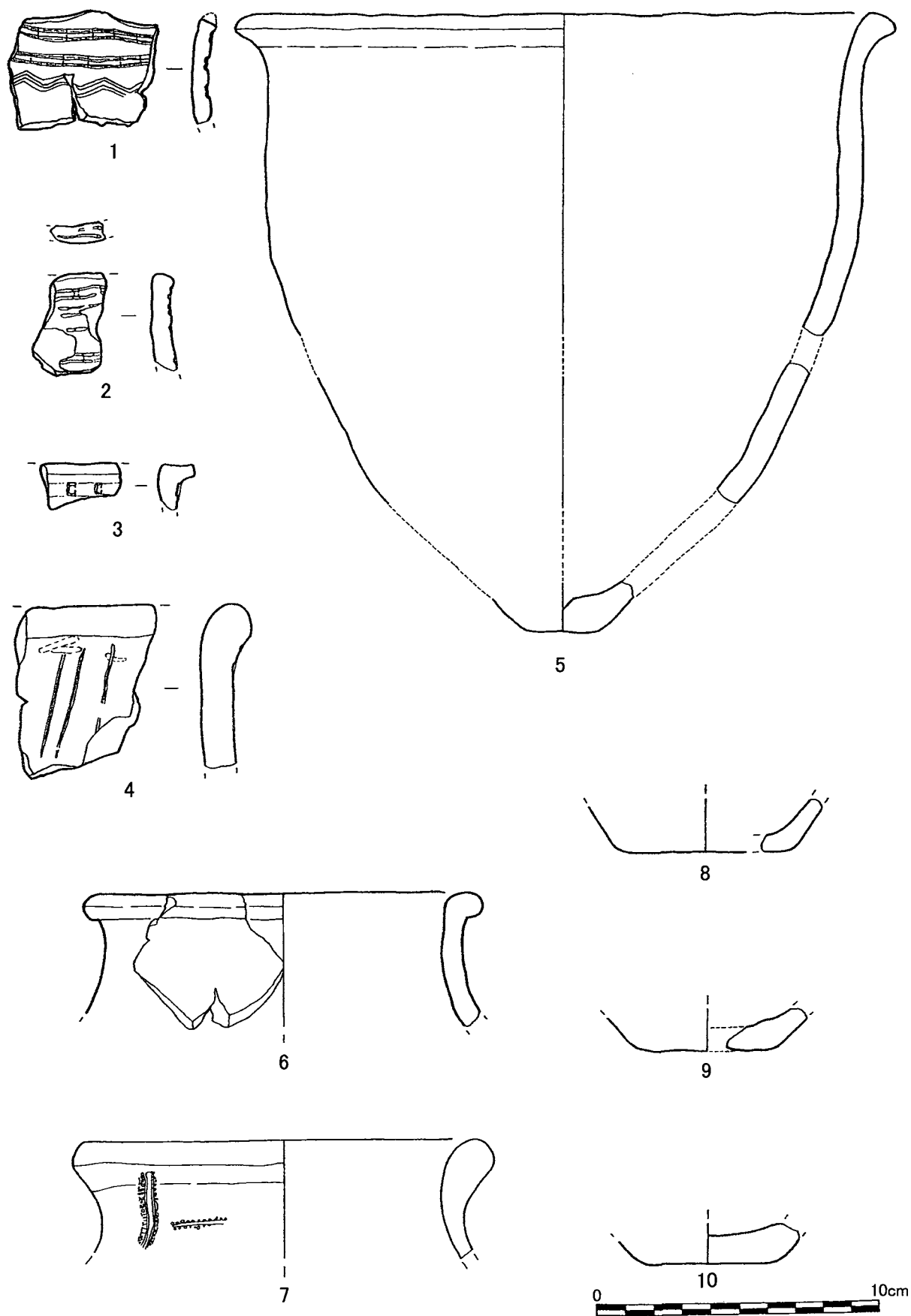
第23図 古宇利原B遺跡試掘調査箇所位置図

第24図は古宇利原B遺跡表面採集資料として保管されていた資料で、昭和56～58年の分布調査等によって採集されたものである。採集された土器資料の多くは口縁部断面が三角形に肥厚する資料で宇佐浜式に分類される資料と考える。一部室川式土器などを含む。第24図3は口縁部外面縁に縦横に短い沈線が配されており珍しい資料である。5は叩石類で敲打痕が残る。7は石斧で刃部は著しく欠損している。残存長9.5cm、厚さ3.3cm、幅6.5cm、重量325gを計る。8は自然円礫の側縁平坦面を磨るなどして加工した作業面と考えられ、長軸両端において敲打を行ったと考えられる。長さ7.1cm、厚さ3.4cm、幅7.3cm、重量293gを計る。

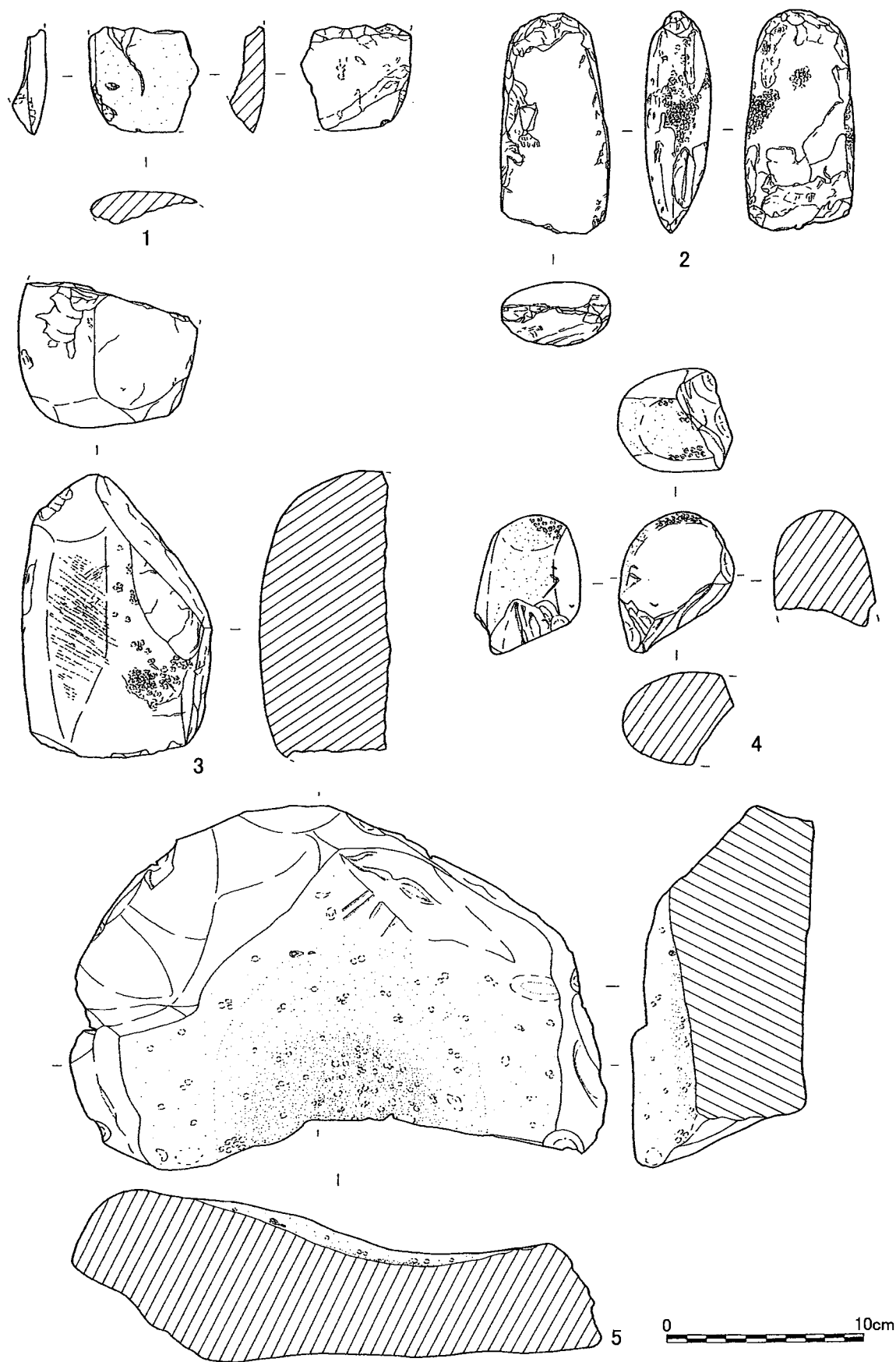
第25～27図は古宇利原B遺跡の試掘調査によって得られた資料で、第25図1・2はT.P.7出土の土器で、口縁部断面が三角形に肥厚する宇佐浜式土器である。同図3～13はT.P.4Ⅲ層出土の土器である。同図3・4は叉状工具による押し引きを施す荻堂式に分類される資料で、同図5～9は室川式土器、同図10～12は宇佐浜式土器、同図13は縦位及び横位にミミズ腫れ状の突帯を配し、両サイドに細い刺突文を施す喜念Ⅰ式土器である。第26図はT.P.4Ⅳ層出土の土器である。同図1は叉状工具による押し引き文と鋸歯文を施す山形口縁土器で、同図2も叉状工具による押し引き文を施す。ともに荻堂式土器の範疇に当たる。同図3～6は室川式土器に分類される資料で、同図3は口唇を平らに仕上げ篋状工具で押し引きする。同図4は厚手の資料で先の細い棒状工具による沈線を縦位、横位に施す。同図5は全形を表す唯一の無文肥厚資料で、若干底面が内側に窪んだ平底から胴部部分で少し膨らみ、口縁部分で外反する。第27図はT.P.1、T.P.4Ⅲ層、T.P.4Ⅳ層出土の石器である。同図1は欠損しており全形を伺うことはできない資料であるが、貝塚時代中期後半の遺跡でよく出土する定角式片刃石斧と思われる。刃部を含めた全体が摩滅しており滑面となる。残存長5.1cm、幅5.3cm、厚さ1cm、重量57gを計る。同図2は一部刃部を欠損した石斧であるが、側面部に敲打痕が集中しており敲石としても併用したと思われる資料である。残存長11.2cm、幅5.4cm、厚さ3.2cm、重量315gを計る。同図3は左肩面に研磨痕が集中する。残存長14.5cm、幅9.6cm、厚さ7.1cm、重量1,152gを計る。同図5は約半分を欠いた石皿で、全体的に風化が著しくアバタ状となる。使用面は浅く凹む。



第25図 古宇利原B遺跡試掘調査資料



第26図 古宇利原B遺跡試掘調査資料



第27図 古宇利原B遺跡試掘調査資料

第6表 昭和56～58年度村内遺跡分布調査表採土器

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	分類	部位	計測値(cm)		焼成	色調	混入物	観察
				口径	底径				
第24図1 図版25-1	表採	宇佐浜	口縁部	12.6	—	堅緻	にぶい 褐色	微砂粒を多量 に混入	口縁部を外に折り曲げ口縁上部を細く仕上げる。 口縁は明瞭なナデが観察できる。
第24図2 図版25-2	表採	室川	口縁部	10.4	—	堅緻	橙色	石英を少量混 入	無文の肥厚口縁で若干外反する。
第24図3 図版25-3	表採	宇佐浜	口縁部	20.4	—	堅緻	橙色	微砂粒、雲母 を多量に混入、 石英、チャー トを少量混入	肥厚口縁。口唇直下に棒状工具で細沈線を施す。
第24図4 図版25-4	表採	宇佐浜	口縁部	11.6	—	良好	橙色	微砂粒、石英、 雲母を多量に 混入	口縁部を直線的に仕上げ、若干外反する無文肥厚 口縁。

第7表 平成13年度試掘調査出土土器

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	分類	部位	計測値(cm)		焼成	色調	混入物	観察
				口径	底径				
第25図1 図版26-1	T.P.7 I	宇佐浜	口縁部	14.0	—	良好	暗赤褐 色	石英を多量に 混入、チャー トと雲母を少 量混入	無文の肥厚口縁。
第25図2 図版26-2	T.P.7 I	宇佐浜	口縁部	—	—	良好	暗赤褐 色	微砂粒を多量 に混入	無文の肥厚口縁。
第25図3 図版26-3	T.P. 4 Ⅲ	荻堂	口縁部	—	—	良好	赤褐色	微砂粒、石英 を少量混入	口唇部及び口縁部に又状工具による押し引 き文を施す。
第25図4 図版26-4	T.P. 4 Ⅲ	荻堂	胴部	—	—	良好	赤褐色	微砂粒、石英 を少量混入	上部には篋状工具による押し引き文を、中位には 又状工具による押し引き文、その下に沈線を施す。
第25図5 図版26-5	T.P. 4 Ⅲ	室川	口縁部	—	—	良好	赤褐色	石英、雲母を 少量混入	有文の肥厚口縁。棒状工具で沈線を施したのち刺 突する。
第25図6 図版26-6	T.P.4 Ⅲ	室川	口縁部	—	—	良好	明赤褐 色	微砂粒を多量 に混入	棒状工具で口唇部に押捺刻文を施す。肥厚帯直下 を篋状工具で押捺する。
第25図7 図版26-7	T.P.4 Ⅲ	室川	口縁部	—	—	堅緻	橙色	微砂粒、石英 を多量に混入	さほど肥厚しない口縁部を外に折り曲げる。篋状 工具で押し引き文を施す。
第25図8 図版26-8	T.P.4 Ⅲ	室川	口縁部	—	—	良好	橙色	微砂粒、石英、 チャー トを多量に 混入	直線的に仕上げ、口縁部で若干外反する無文肥厚 口縁。全体的に細め。
第25図9 図版26-9	T.P.4 Ⅲ	室川	口縁部	—	—	良好	橙色	微砂粒、チャー トを少量混入	無文の肥厚口縁。口頸部を細く仕上げ外反する。
第25図10 図版26-10	T.P.4 Ⅲ	宇座浜	口縁部	24.4	—	良好	橙色	微砂粒、黒色 及び赤色の鉱 物を少量混入。	無文の肥厚口縁。口縁上部をナデで接合痕を消し ている。アバタ状を呈する。
第25図11 図版26-11	T.P.4 Ⅲ	宇座浜	口縁部	22.0	—	堅緻	明赤褐 色	微砂粒、チャー トを多量に混 入	無文の肥厚口縁。成形時のナデが顕著で、肥厚帯 直下を篋状工具で成形し、肥厚部を強調。
第25図12 図版26-12	T.P.4 Ⅲ	宇座浜	口縁部	13.6	—	良好	橙色	微砂粒、石英、 雲母を多量に 混入	無文の肥厚口縁。口頸部が若干くびれる。
第25図13 図版26-13	T.P.4 Ⅲ	喜念 I	胴部	—	—	良好	明赤褐 色	微砂粒、石英、 雲母を少量混 入	縦及び横にミミズ腫れ状の細い隆起凸帯を配し、 両サイドに丸く細い刺突文を連続して施す。

第 8 表 平成13年度試掘調査出土土器

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	分類	部位	計測値(cm)		焼成	色調	混入物	観察
				口径	底径				
第26図1 図版27-1	T.P. 4 Ⅳ一括	萩堂	口縁部	—	—	堅緻	暗赤褐色	石英、チャート を多量に混入	山形口縁。又状工具による押し引き文と鋸歯文を 施す。
第26図2 図版27-2	T.P. 4 Ⅳ	萩堂	口縁部	—	—	脆弱	赤褐色	微砂粒を多量 に混入	口唇部及び口縁部に又状工具による押し引 き文を施す。
第26図3 図版27-3	T.P. 4 Ⅳ	室川	口縁部	—	—	良好	明赤褐色	微砂粒、石英 を多量に混入	有文の肥厚口縁。口唇部を平らに仕上げる。篋状 工具で押し引き文を施す。
第26図4 図版27-4	T.P. 4 Ⅳ	室川	口縁部	—	—	脆弱	黒赤褐色	微砂粒、雲母 を少量混入	有文の肥厚口縁。棒状工具で沈線を縦位、横位に 施す。
第26図5 図版27-5	T.P. 4 Ⅳ	室川	一括	21.2	2.6	良好	赤褐色	微砂粒、石英 を多量に混入	無文の肥厚口縁。底部からの立ち上がり、胴部で の膨らみはいずれも緩やかである。
第26図6 図版27-6	T.P. 4 Ⅳ一括	室川	口縁部	14.2	—	脆弱	橙色	微砂粒、石英 を多量に混入	無文の肥厚口縁。口唇部を平らに仕上げる。

第 9 表 昭和56～58年度村内遺跡分布調査表採石器

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	器種	方量 (cm・g)				観察
			長さ	幅	厚さ	重量	
第24図5 図版25-5	表採	磨石	6.9	2.7	2.5	77	欠損品。上面部に敲打痕、側面には磨痕が残る。
第24図6 図版25-6	表採	磨石	21.3	13	9.7	4,360	約半分を失う欠損品。全体的に風化が著しくアバタ状となる。表面全体が 作業面となる。
第24図7 図版25-7	表採	石斧	9.5	6.5	3.3	325	刃部欠損のパチ形磨製石斧。剥離面を除いた部分全体を研磨。
第24図8 図版25-8	表採	磨石	7.1	7.3	3.4	293	欠損品。上・下両端は敲打痕が顕著。

第10表 平成13年度試掘調査出土石器

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層位	器種	方量 (cm・g)				観察
			長さ	幅	厚さ	重量	
第27図1 図版28-1	T.P. 1 Ⅰ	石斧	5.1	5.3	1.0	57	片刃石斧の欠損品。刃部を含め全体が摩滅して滑面となる。
第27図2 図版28-2	T.P. 4 Ⅳ	石斧	11.2	5.4	3.2	315	全体的に剥離痕が顕著で側面には敲打痕が集中する。敲石としても併用。
第27図3 図版28-3	T.P. 4 Ⅳ	敲石	14.5	9.6	7.1	1,152	全体の剥離が著しい磨石欠損品。左肩面に研磨痕が集中する。
第27図4 図版28-4	T.P. 4 Ⅲ	敲石	5.9	5.6	4.6	220	欠損品。上面部分に敲打痕。
第27図5 図版28-5	T.P. 4 Ⅳ	石皿	16.0	26.9	5.5	8,700	全体的に風化が著しくアバタ状となる。使用面は浅く凹む。

第Ⅵ章 総 括

前章までに古宇利原B遺跡の発掘調査の成果を中心に、これまで実施された調査で得られた資料を報告した。最後に若干のまとめをして結びとしたい。

まず最初に、古宇利原B遺跡はこれまで主なものだけでも下記の5回に渡る調査が実施されている。

1967年7月（3日間） 金武正紀（金武1975）

1969年8月7日～10日 豊見城高校郷土史研究クラブ（郷土史研究クラブ1970）

1981年～1983年 今帰仁村教育委員会 村内遺跡分布調査（上原ほか1984）

2001年9月18日～11月30日 今帰仁村教育委員会 遺跡範囲確認調査

2003年11月4日～2004年1月31日 今帰仁村教育委員会 道路建設に伴う緊急発掘調査

このうち、教育委員会で実施し得られた資料については本報告によって紹介してきた。上記の調査等から遺跡を俯瞰し、古宇利原B遺跡の年代的位置づけについて考えてみたい。これまで検出された土器の中で最も古式の様相を呈する資料として第18図1に図示した小片がある。いわゆる伊波式土器の特徴を有するものと推測するが保存状況が悪く詳細は不明である。次に荻堂式土器が出土している。特に2001年の試掘調査T.P.4のⅢ・Ⅳ層より数点出土している。しかしこれらの縄文時代後期相当期に該当する土器資料は全体の出土数からすると少なく、そのほとんどは室川式あるいは宇佐浜式土器として分類される縄文時代後期末から縄文時代晩期に該当する資料が主体となる。既に遺跡の年代については金武正紀、豊見城高校の調査時に指摘され（郷土史研究クラブ1970）、さらに多和田真淳によって「下層は運天貝塚西側下層に対応し、（中略）中層は宇佐浜式が出土する」として概括しており概ね多和田の指摘する2つの時期が当該遺跡の主体時期であると考ええる。しかし近年教育委員会の実施した調査ではいずれも遺跡の保存状態不良のため、層位による検証がほとんど行えていない。表面採集等によっても当該地域では土器の細片を拾うのがやっとなことことから、教育委員会において確認する調査（平成13年度）以前に遺跡の大半は壊滅的な状態で改変され滅失したと考える。おそらく1981～1983年の表面調査によって大きな土器片が拾われていることから考えると、これ以後の耕作等によって遺跡は著しく失われたものと考えられる。

次に検出された遺構について概括する。繰り返しになるが本調査区では包含層の大部分が耕作によって失われている。このため浅い窪みの中に包含層がわずかに認められるという状況であった。この浅い窪みが岩盤を竪穴状に掘り込んだものであることが確認され、調査終了時には竪穴住居跡として判断した。この住居跡として推測される竪穴遺構は6基確認されており、いずれも切り合うことなく独立している。ただし、明確なプランを確認することのできない5・6号や、遺構が調査地区外に及んでいる1・4号については切り合いの関係については不明である。特に6号については、そのプランも不明瞭でありこれを住居跡として説明するには疑問を挟まないわけではないが、最終的には落ち込み内の岩盤である石灰岩に焼けた痕跡があることから、これを屋内炉と推定し、いずれの落ち込みとも住居跡として報告した。ここでは比較的明確に遺構のプランを確認できた2・3号竪穴住居跡について、周辺遺跡の状況とあわせて紹介する。

まず古宇利原B遺跡は表土から地山面までの堆積が浅く、加えて岩盤の発達する地形であ

る。その為堅穴は岩盤を直接掘り込む形となる。床面は岩盤を水平に削り、炉跡と推定される焼け跡付近は若干窪む。また、住居跡内には壁面に沿って浅いピットが並ぶことから柱穴と推定した。柱穴が最も良好に検出されるシヌグ堂遺跡（金武ほか1985）では堅穴の壁面に沿った形で並ぶものが確認されており、これに類する。これらの点と形状等から考慮すると、第2号堅穴住居跡についてはシヌグ堂遺跡第23号、47号と類似する。第3号堅穴住居跡では南側に溝状を呈する凹みが確認されており、これと類似する事例としてシヌグ堂遺跡第61号堅穴住居跡があげられる。さらに第2号堅穴住居跡では覆土内に石材が密集して検出されることから、ウフタ遺跡（青崎2002）やシヌグ堂遺跡（金武ほか1985）、高嶺遺跡（金武・金城1989）等でも確認される礫によって石囲いとする住居跡の可能性も推定される。いずれも、貝塚時代中期（縄文時代晩期相当期）に盛行する正方形の堅穴住居跡である。第2・3号堅穴住居跡とも出入り口の推定は困難であるが、確認された遺構の全てが南北方向の傾斜面に南北に並ぶ特徴がある。さらに言及するならば傾斜面の高い方ほど深く掘り込んでおり、より掘り込みの浅い南側を出入り口として選択する可能性は高いと考えられる。南側に出入り口を設ける特徴は現古宇利島の集落の形態にも通じる。一般的には北風を避けるように島の高所を背にして傾斜面を上手く利用し集住することからも想像することができる。

各遺構の年代については、遺物が検出されていない第4号、新しい遺物を出土する第1号を除き、ほとんどが室川式土器を主体としている。覆土からの出土で床着資料が検出されていないので遺構の廃棄年代を当該期に結びつけるのは早計であるが、これまで実施されてきた表採資料からは宇佐浜式が多く採集されている事から考えると興味深い結果である。

土器以外の出土遺物で特筆されるものに貝製品と骨製品が得られている。骨製品はイノシシの尺骨を利用した骨針で古宇利原A遺跡でも同様の遺物が検出されている（上原ほか1983）。貝製品は巻貝の殻頂部を研磨加工し装飾品としたもので貝玉、ビーズ、貝製装身具として報告される資料である。木下尚子氏によれば縄文時代後期には一つの隆盛期があるとされ（木下2004年私信）、古宇利原B遺跡もこの特徴を示す一つの事例として報告できる。

以上、発掘調査で確認された遺構、遺物から古宇利原B遺跡の年代や各遺構の特徴についてまとめた。冒頭で若干触れたが古宇利原B遺跡以外にも島内には古宇利原A遺跡や中原遺跡が知られている。古宇利原A遺跡については発掘調査が行われており年代については縄文時代中期相当期（嘉徳Ⅰ式）や縄文時代後期相当期（伊波式・荻堂式・等）などの土器が出土しており、本調査の資料と比して古式の資料を多出している。今後は古宇利島の先史時代を理解するためにも、周辺地域に点在する遺跡との関連などを含め調査を進めることが重要である。

末文ながら、今回発掘調査を実施した古宇利原B遺跡については、島内の調査ということもあり昼夜勤務する事も多く、小浜美千子古宇利区長をはじめ古宇利区の多くの方より遺跡の調査に理解いただき成しえたものである。記して感謝し、お礼申し上げます。

引用文献

- 目崎茂和 1988年『南島の地形』沖縄出版
- 仲原弘哲ほか 1998年『すくみち』第32号 今帰仁村教育委員会・歴史文化センター
- 津波高志ほか 1982年『沖縄国頭の村落（上）』新星図書出版
- 上原静ほか 1984年『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10集 今帰仁村教育委員会
- 金武正紀ほか 1985年『シヌグ堂遺跡―第1・2・3次発掘調査報告―』沖縄県文化財調査報告書第67集 沖縄県教育委員会
- 上原静ほか 1983年『古宇利原遺跡発掘調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第8集 今帰仁村教育委員会
- 青崎和憲ほか 2002年『ウフタⅢ遺跡』龍郷町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書（2）龍郷町教育委員会
- 金武正紀・金城亀信 1989年『宮城島遺跡分布調査報告』沖縄県文化財調査報告書第92集 沖縄県教育委員会
- 金武正紀 1975年「古宇利島の先史遺跡調査概報」『南島考古』No.4 沖縄考古学会
- 郷土史研究クラブ 1970年「古宇利島調査報告」『豊高郷土史』第3号
- 高宮廣衛 1993年『沖縄縄文土器研究序説』第一書房
- 1983年『沖縄大百科事典』 沖縄タイムス社

参考文献

- 仲原弘哲ほか 1997年『なきじん研究』Vol.7 今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史文化センター
- 仲原弘哲ほか 1993年『なきじん研究』Vol.3 今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史文化センター
- 仲原弘哲ほか 1992年『なきじん研究』Vol.2 今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史文化センター
- 仲原弘哲ほか 1998年『なきじん研究』Vol.8 今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史文化センター
- 上原正依ほか 1963年「古宇利島調査報告」『沖縄民俗』第8号 琉球大学民俗研究クラブ
- 杉井健 2003年「沖縄諸島における居住形態の変遷とその特質」『先史琉球の生業と交易 改訂版』熊本大学文学部
- 宮城弘樹ほか 2002年『長根原遺跡発掘調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第15集 今帰仁村教育委員会

写真図版



古宇利原B遺跡発掘調査の様子



図版1. 空から見た古宇利島



古宇利原B遺跡

遺跡位置図



図版 2. 古宇利原 B 遺跡発掘調査区全景



図版 3. 発掘調査完了全景



図版 4. 第 1 号竪穴住居跡遺構検出状況



図版 5. 第 1 号竪穴住居跡完掘状況



図版 6. 第 1 号竪穴住居跡内遺物出土状況



図版 7. 第 2 号豎穴住居跡遺構検出状況



図版 8. 第 2 号豎穴住居跡礫検出状況



図版 9. 第 2 号竪穴住居跡内ピット検出状況（覆土内礫除去）



図版10. 第 2 号竪穴住居跡完掘状況



図版11. 第3号竪穴住居跡遺構検出状況



図版12. 第3号竪穴住居跡完掘状況



図版13. 第4号竪穴住居跡完掘状況



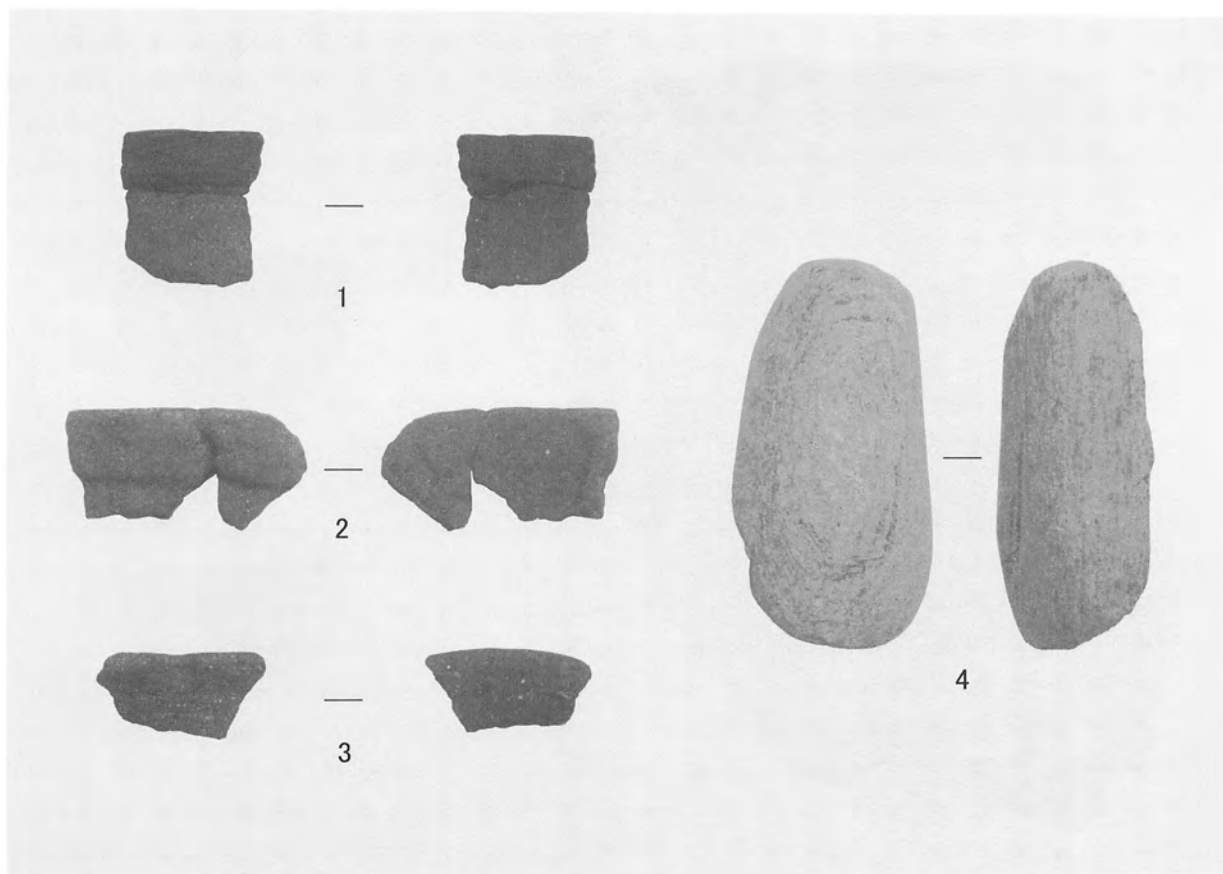
図版14. 第5号竪穴住居跡礫検出状況



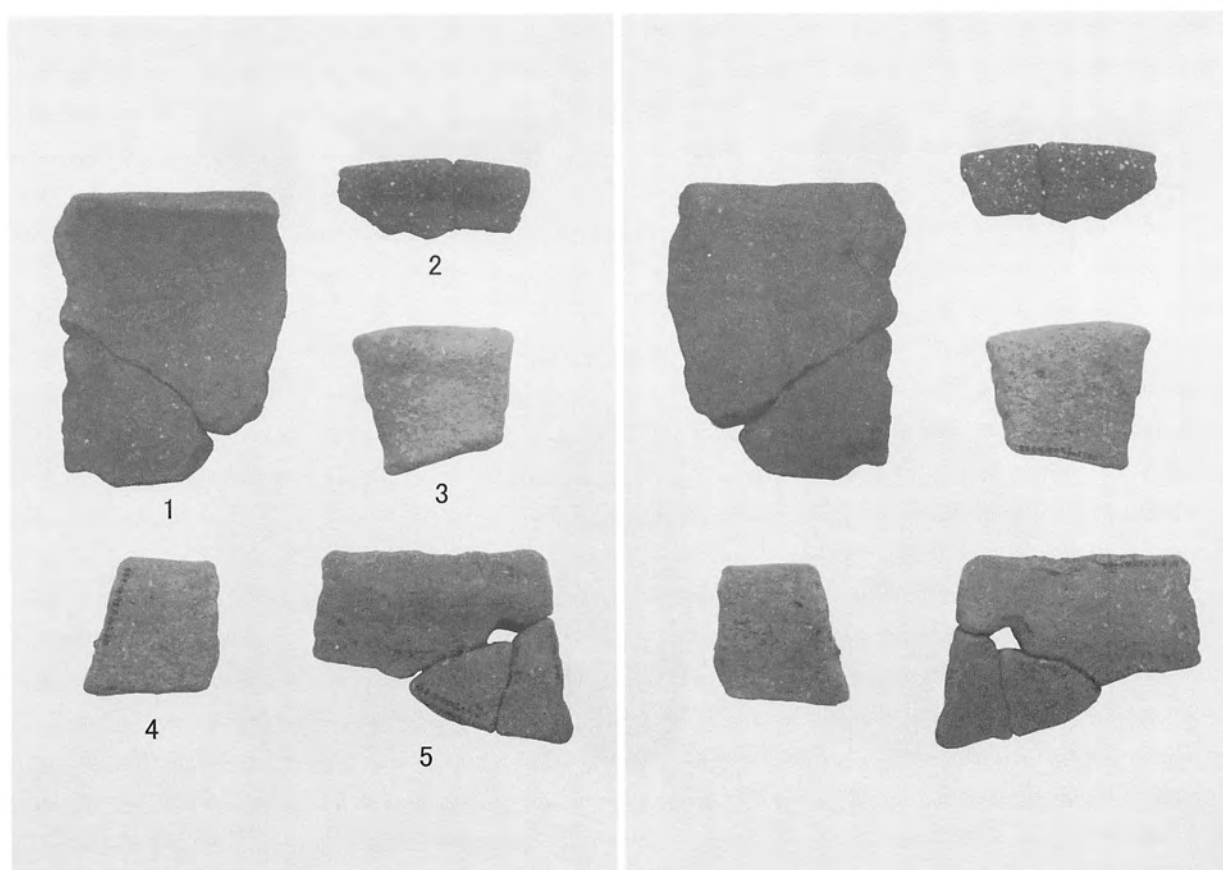
図版15. 第6号竪穴住居跡礫検出状況



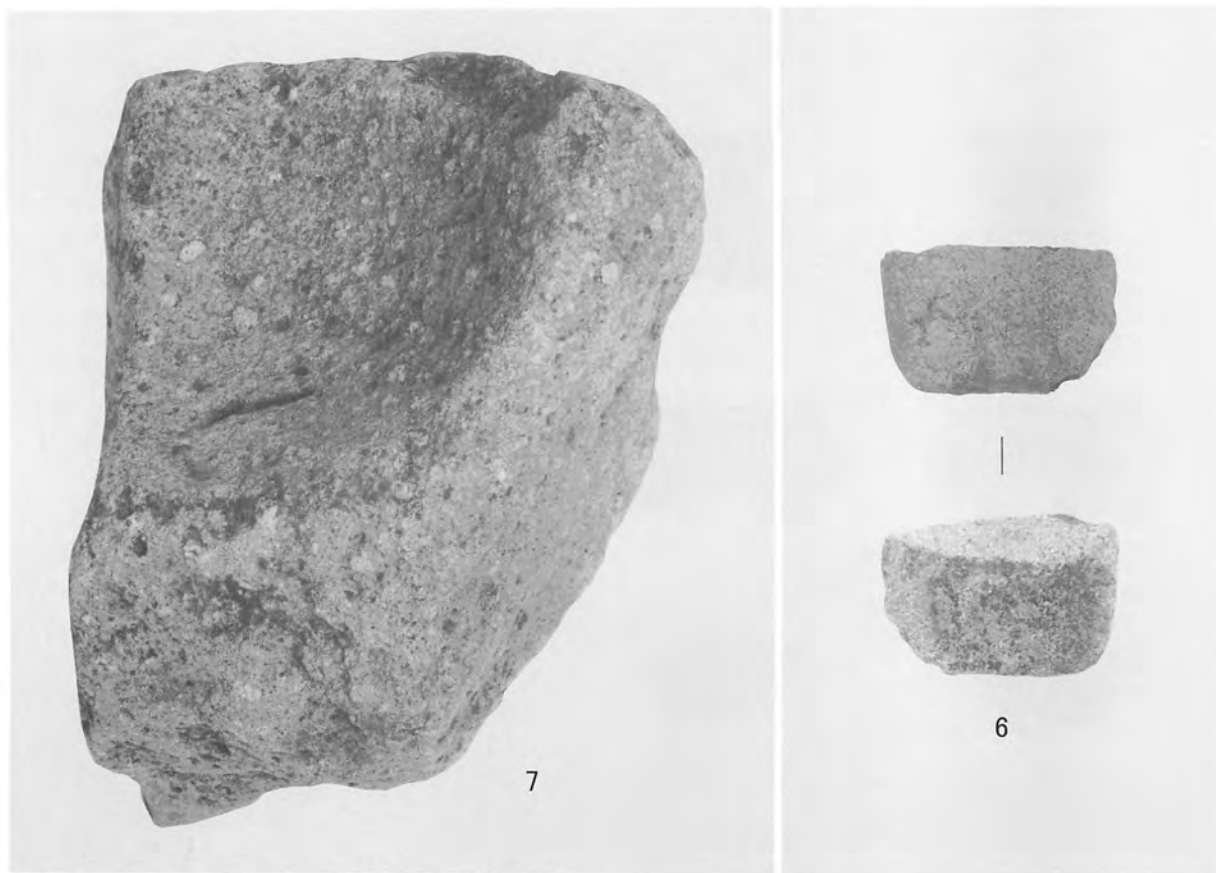
図版16. 第6号竪穴住居跡内遺物出土状況



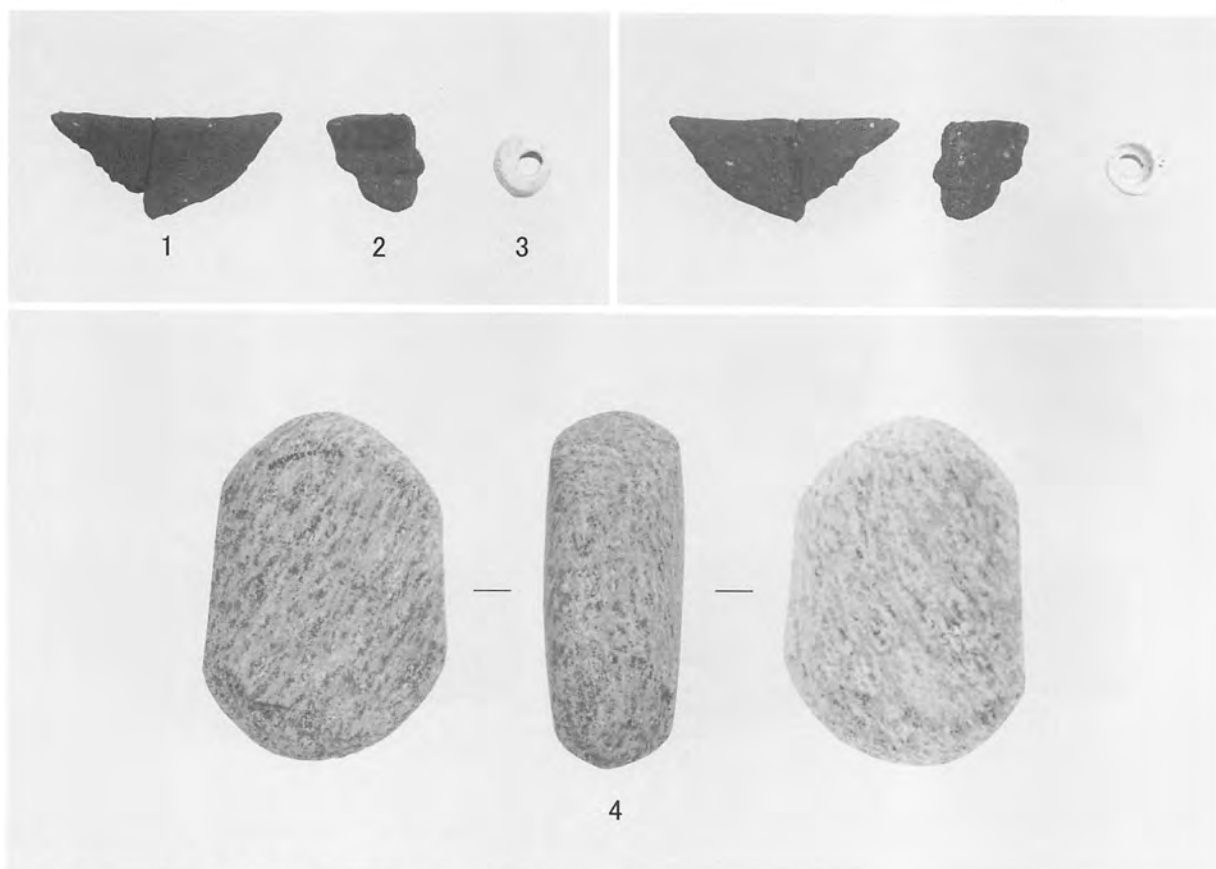
図版17. 第1号竪穴住居跡内覆土出土遺物



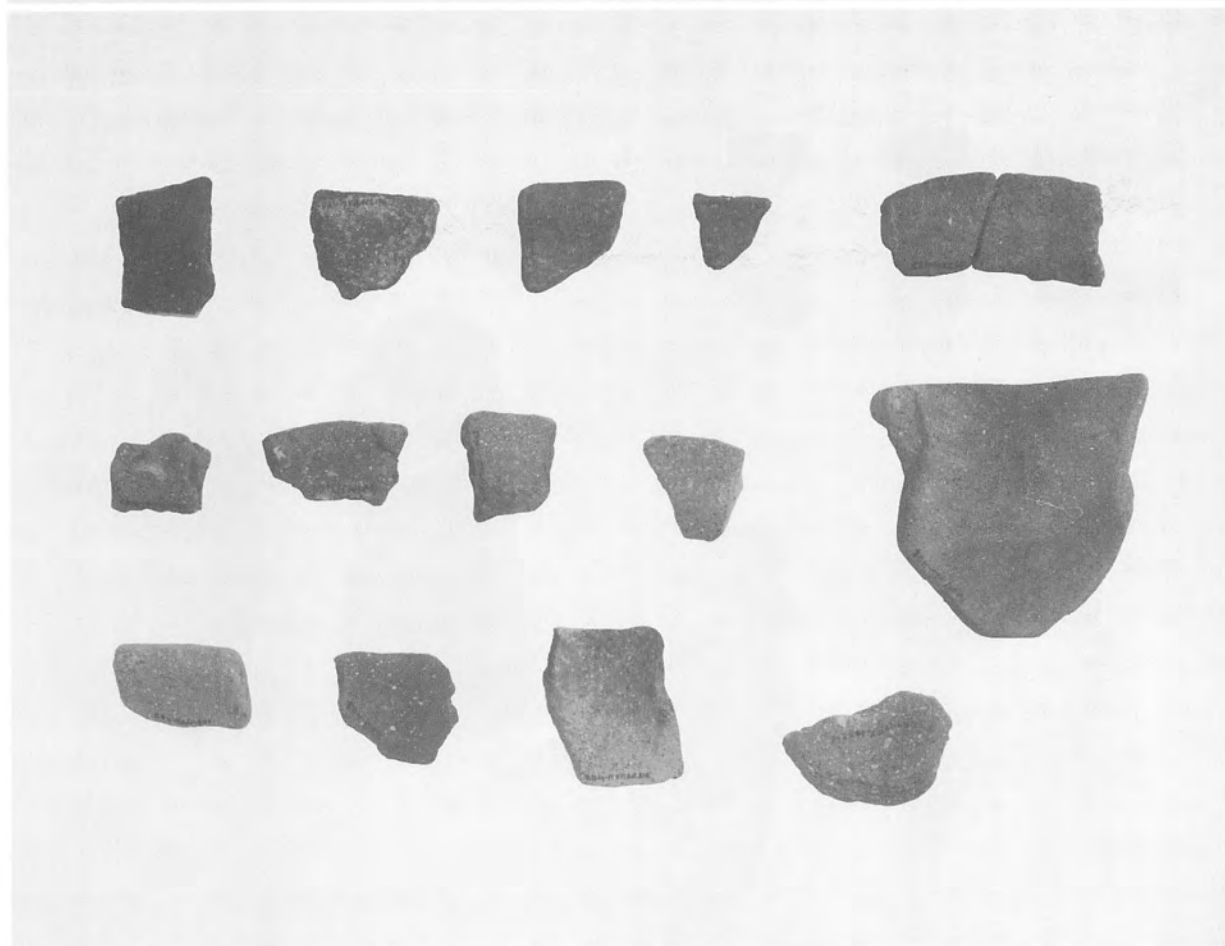
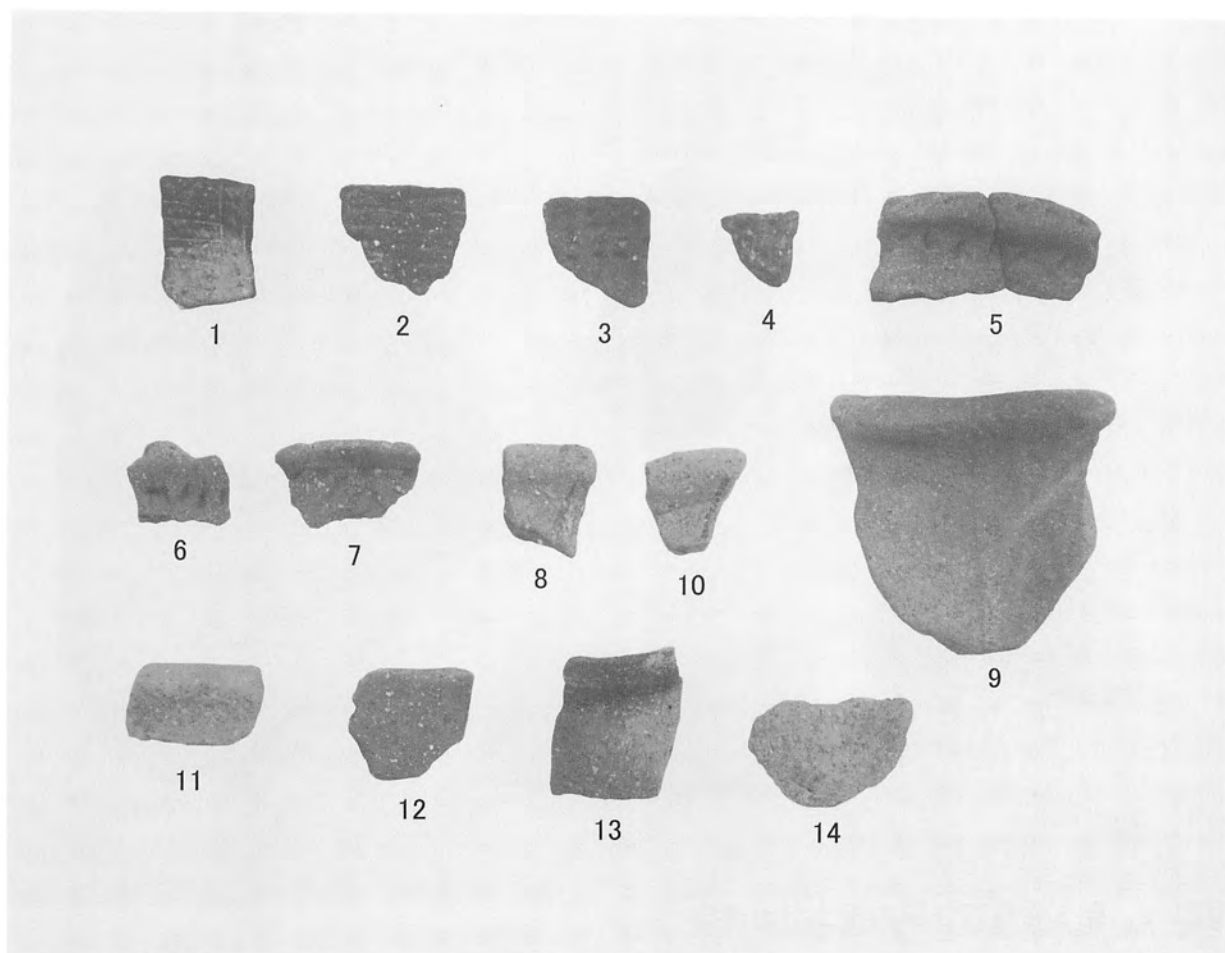
図版18. 第2号竪穴住居跡内覆土出土遺物



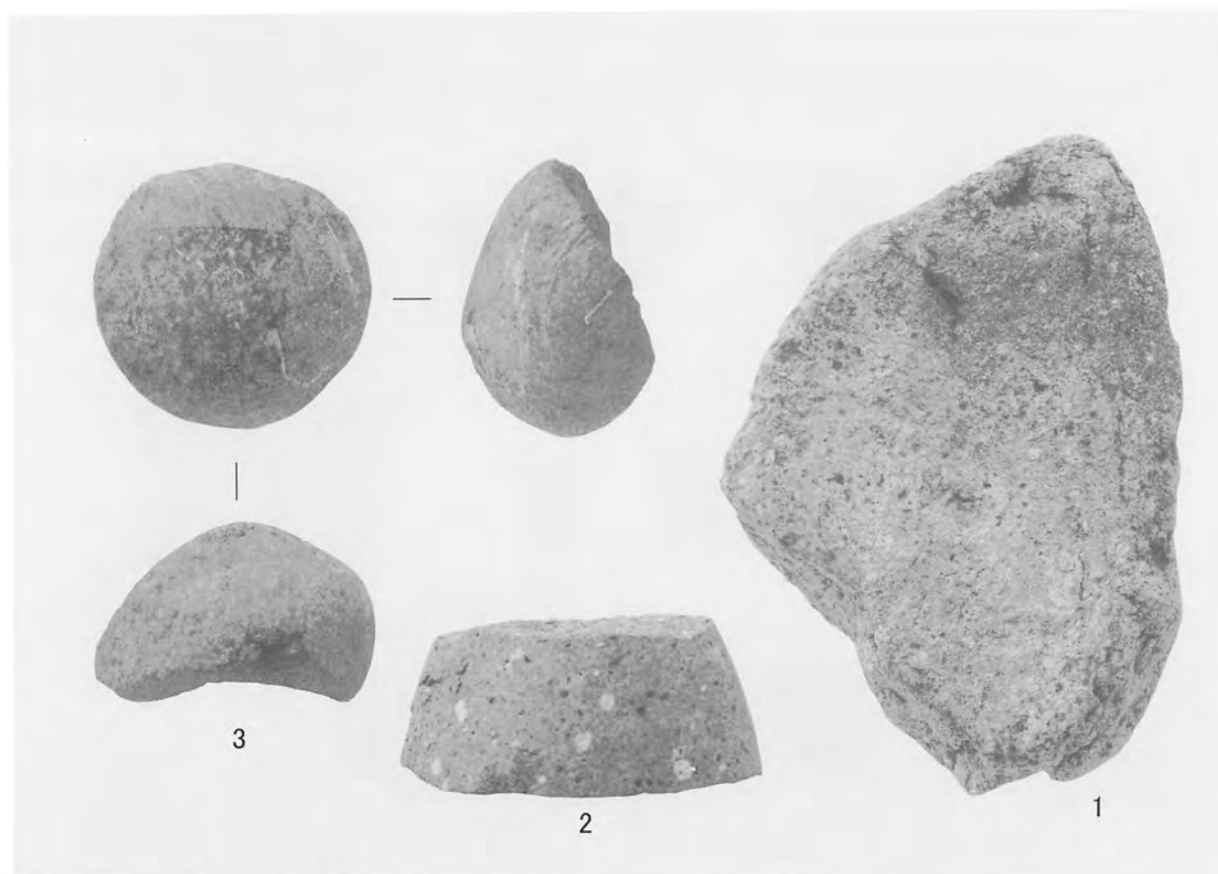
図版19. 第2号竪穴住居跡内覆土出土遺物



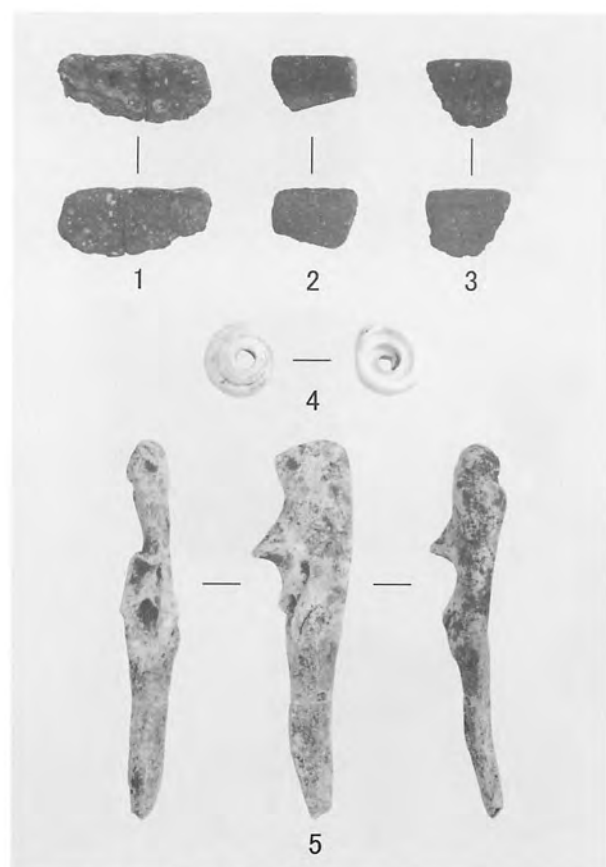
図版20. 第3号竪穴住居跡内覆土出土遺物



図版21. 第6号竪穴住居跡内覆土及び遺構外出土遺物



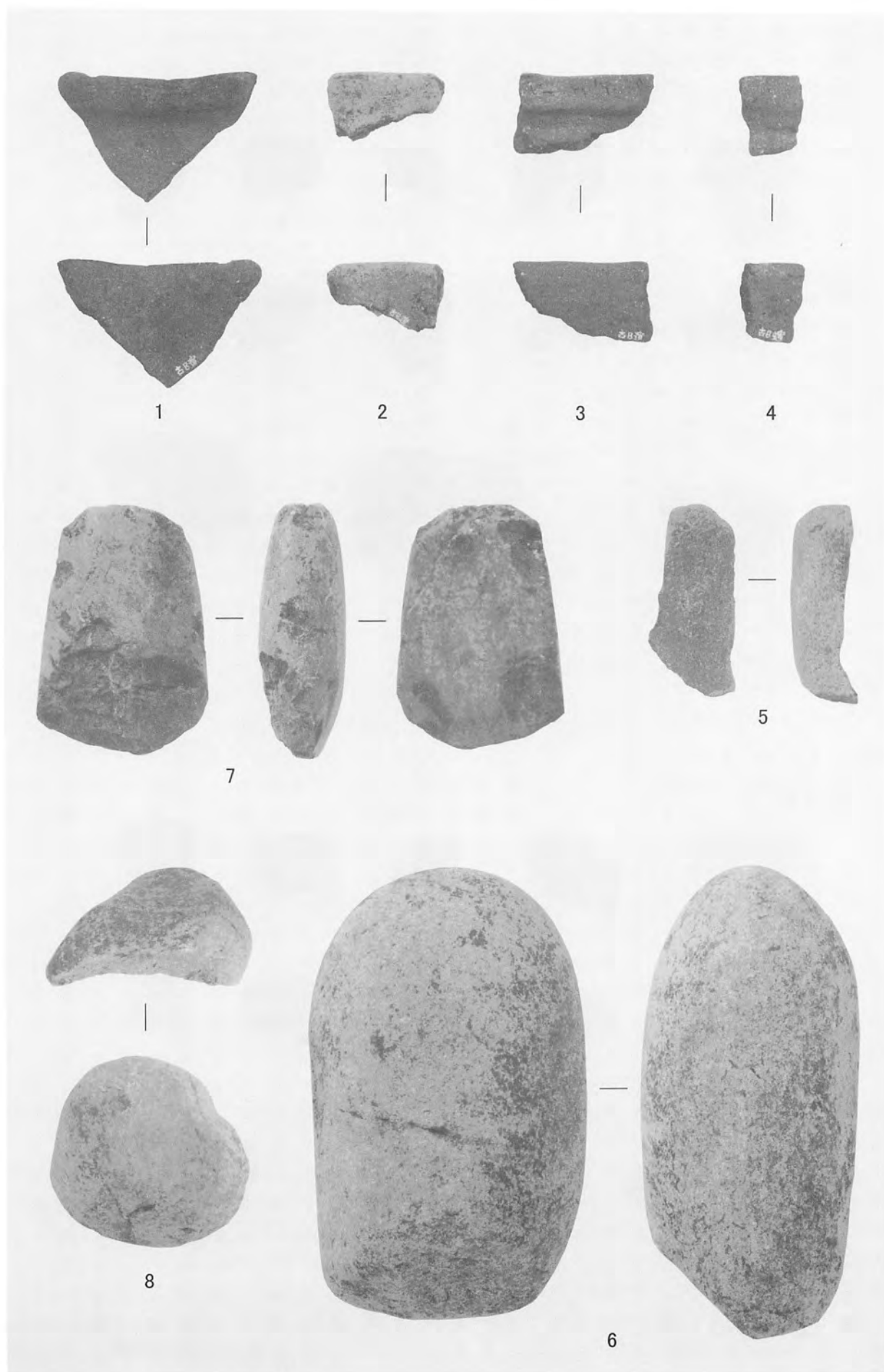
図版22. 第5号竪穴住居内覆土出土遺物



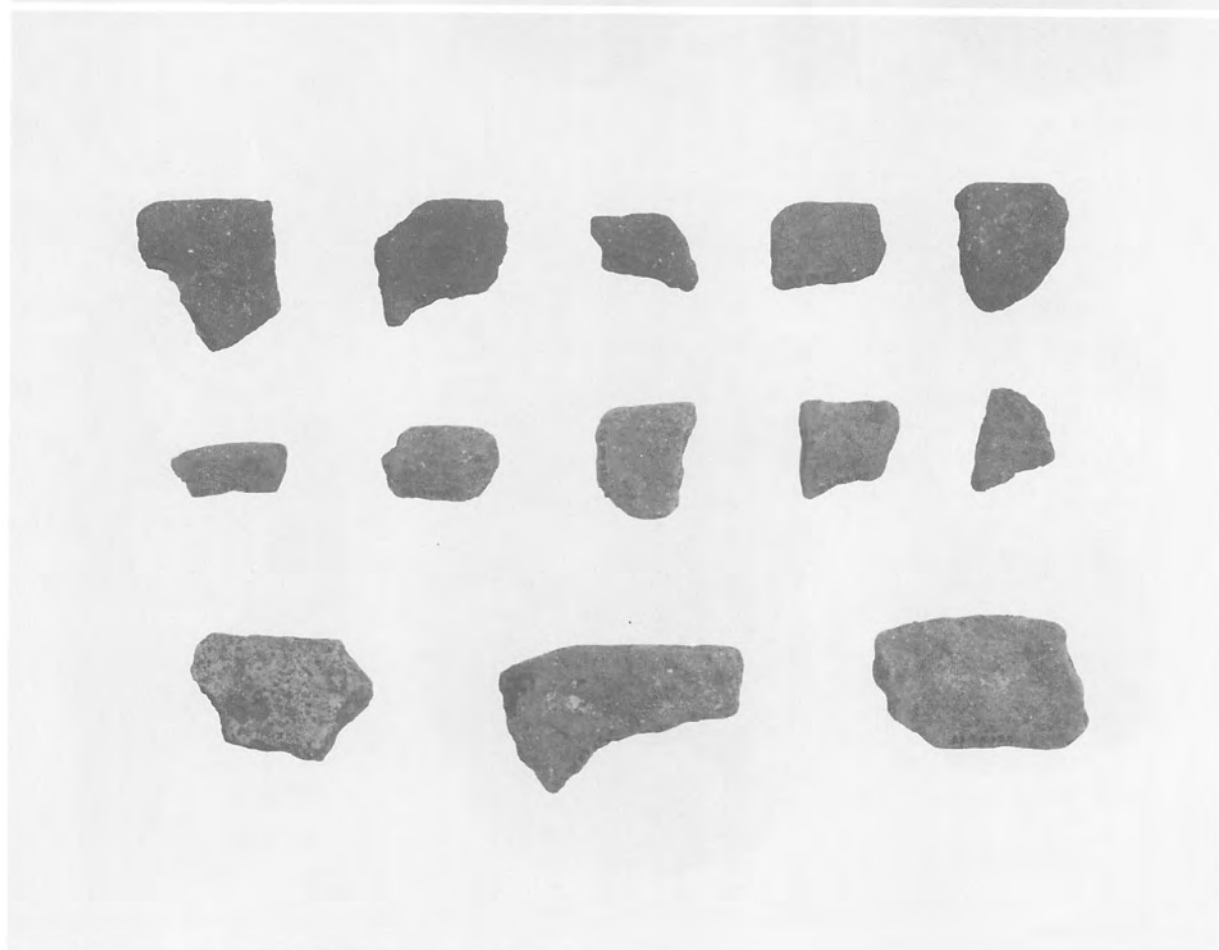
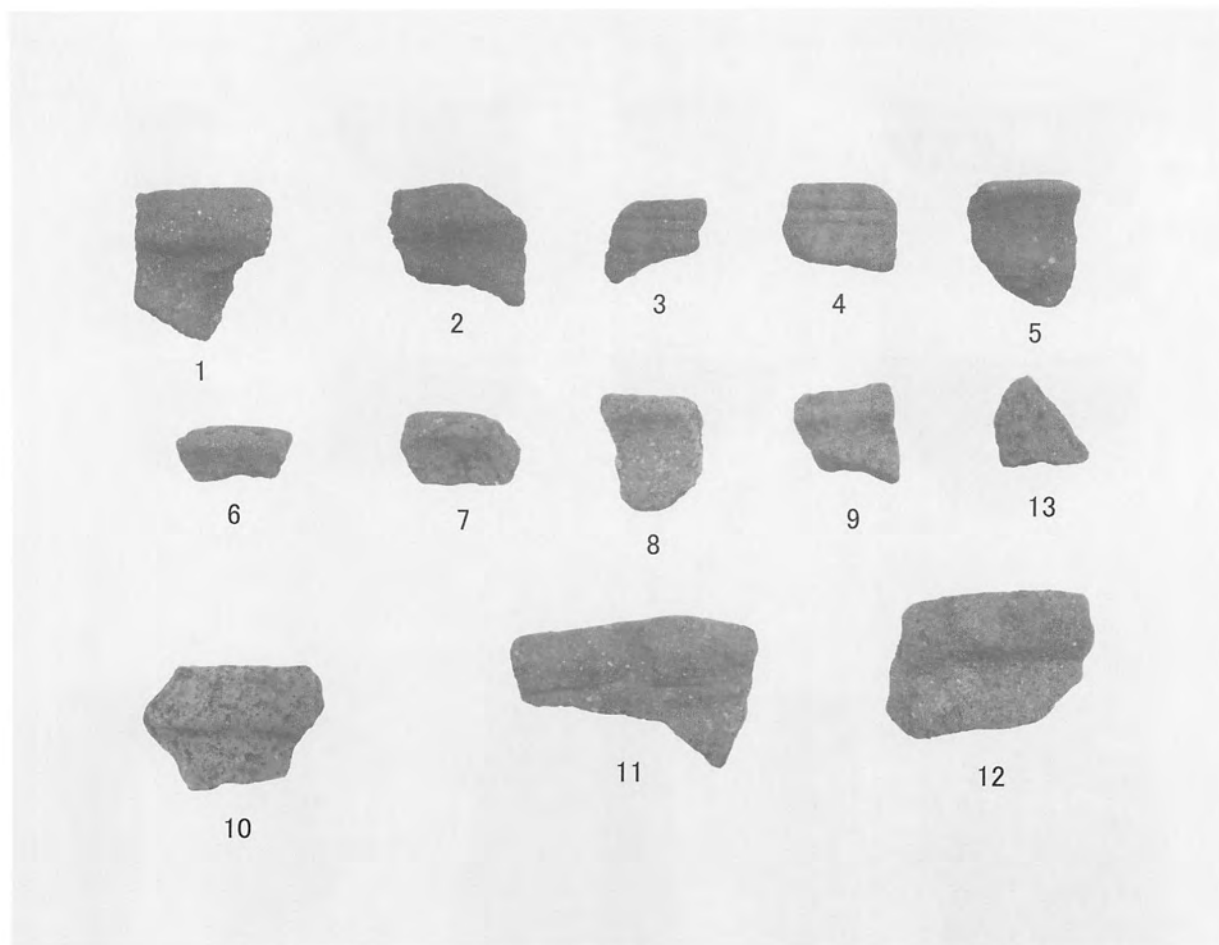
図版23. 第6号竪穴住居内覆土出土遺物



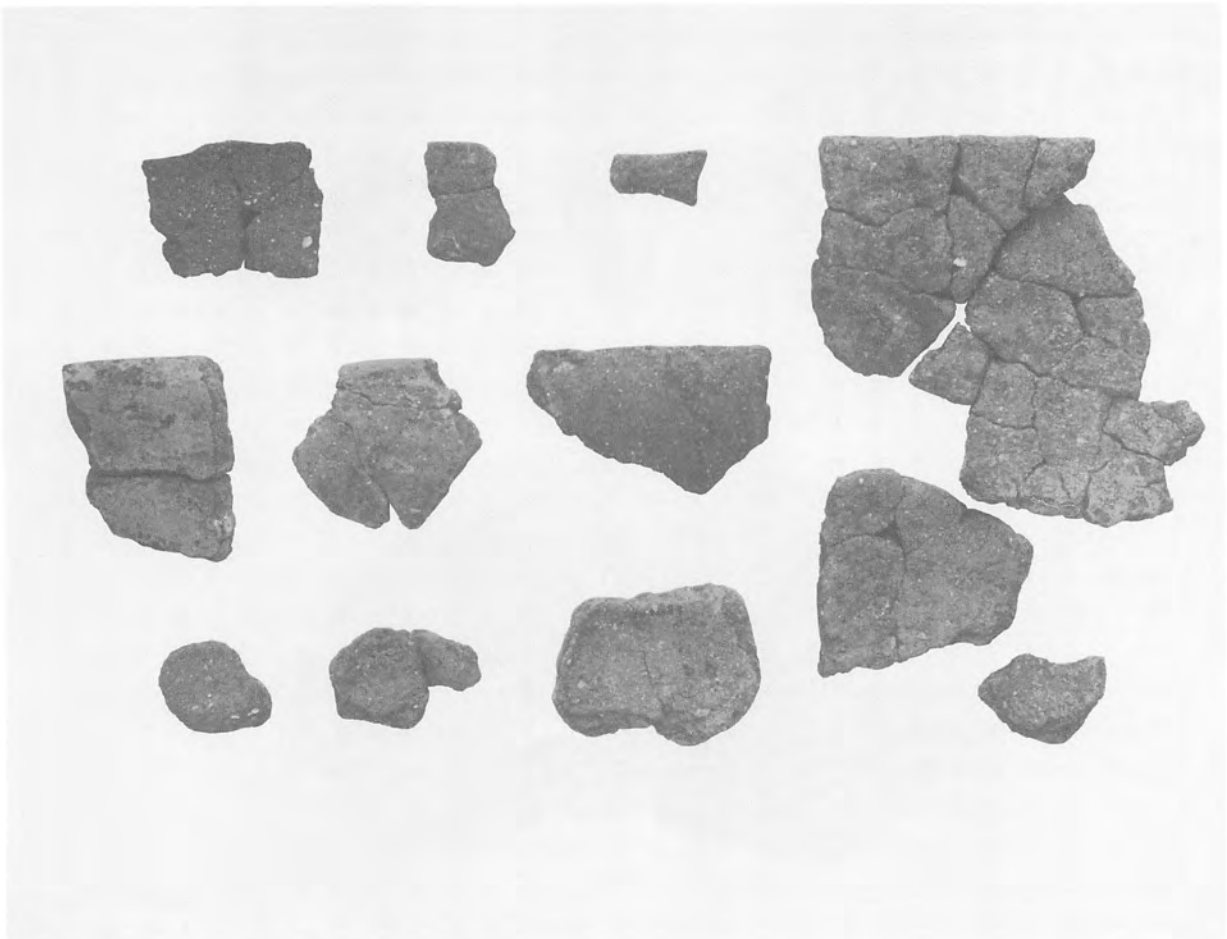
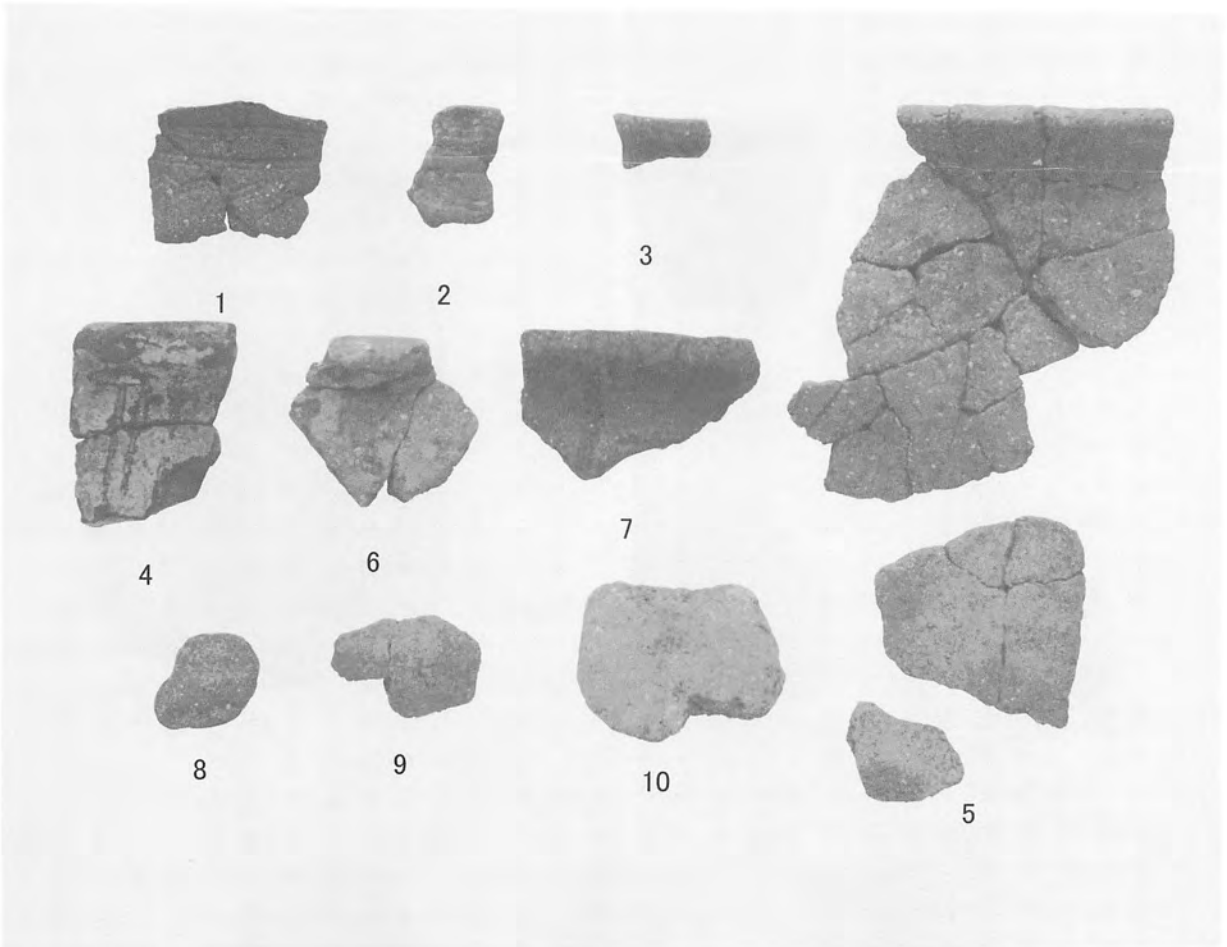
図版24. 竪穴住居以外の出土遺物



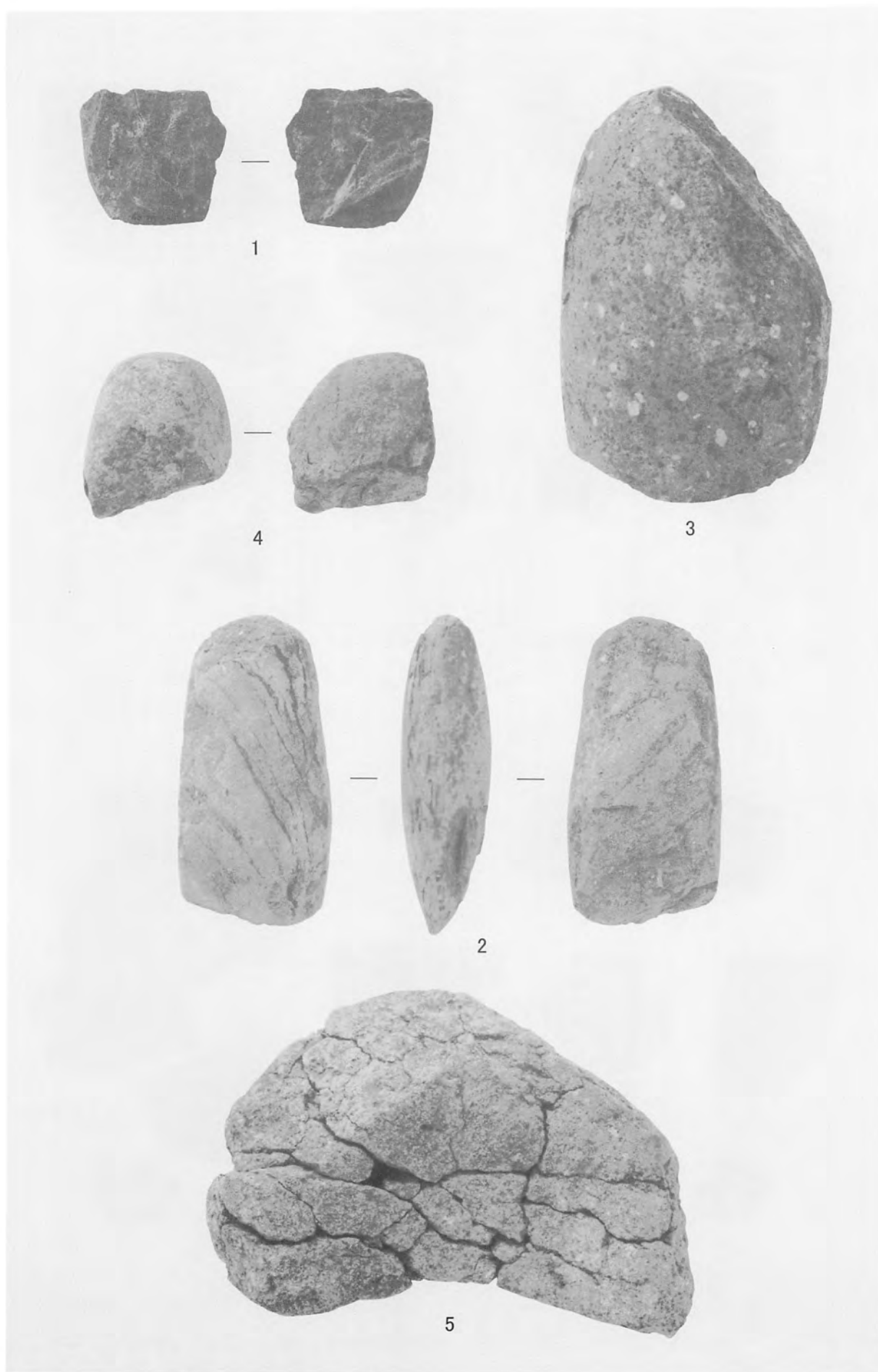
図版25. 古宇利原B遺跡表採資料



図版26. 古宇利原 B 遺跡試掘調査資料



図版27. 古宇利原 B 遺跡試掘調査資料



図版28. 古宇利原B遺跡試掘調査資料

報 告 書 抄 録

ふ り が な		こうりばるびーいせき						
書 名		古宇利原B遺跡発掘調査報告書						
副 書 名		村道古宇利横田原線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告						
巻 次								
シ リ ー ズ 名		今帰仁村文化財調査報告書						
シ リ ー ズ 番 号		第16集						
編 著 者 名		玉城 靖						
発 行 機 関		今帰仁村教育委員会						
所 在 地		〒905-0492 沖縄県今帰仁村字仲宗根232 TEL 0980-56-3201						
発 行 年 日		西暦2004年 3 月31日 (平成16年)						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
こうりばるびーいせき 古宇利原B遺跡	なきじん 今帰仁村古宇利	473065		26°41'34"	128°01'19"	15年度 2003 11 ～ 2004 01	300㎡	村道古宇利横田 原線道路改良工 事に係る緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
古宇利原B遺跡	集落	縄文時代 後期から 縄文時代 晩期併行 期	竪穴住居跡		土器 伊波式 萩堂式 室川式 宇佐浜式 ほか 石器 叩石 石皿			

用語解説

貝塚時代 沖縄における新石器時代の遺跡は貝塚を形成することが多いため、この時代を貝塚時代と呼んでいる。この名称は徳永重康によって1936年に英文による報告書中でShell mound ageと用いられたのが最初である。それ以前は石器時代の呼称が一般的であった（沖縄大百科事典より）。

高宮廣衛氏の沖縄諸島の暫定編年第3次案

九州	暫定編年	土器形式	沖縄諸島発見の九州系土器	その他の年代資料	現行編年
縄文時代	早期	ヤブチ式土器 東原式土器	爪形文土器	ヤブチ式 6670±140 Y. B. P 東原式 6450±140 Y. B. P	早期
	前期	室川下層式土器 曾畑式土器 条痕文土器 神野A式土器 神野B式土器	曾畑式土器 条痕文土器	曾畑式 (波具地東原) 4880±130 Y. B. P	
	中期	面縄前庭様式 1. 具志川式 2. 神野C式 3. 面縄前庭式			
	後期	神野D式土器 神野E式土器 伊波式土器 萩堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式(熱田原) 3370±80 Y. B. P 伊波式(室川) 3600±60 Y. B. P	前期
	晩期	室川上層式土器 宇佐浜式土器		宇佐浜式は黒川式 並行とみられる。	
弥生時代	前期	真栄里式土器	板付Ⅱ式 亀ノ甲類似		後期
	中期	具志原式土器	山ノ口式土器		
	後期	アカジャンガー式土器	免田式土器	アカジャンガー式は 中津式並行とみられる。	
	古墳時代 / 平安時代	フェンサ 下層式土器		類須恵器	

※フェンサ下層式は古墳時代初期とする見解もある

層序 遺跡において、遺構・遺物はこれを埋めた堆積物の中に痕跡をとどめる。こうしたいくつかの堆積層・遺構等の重なりあう関係を、時間的關係に従って整理・配列した結果を層序という（世界考古学事典より）。

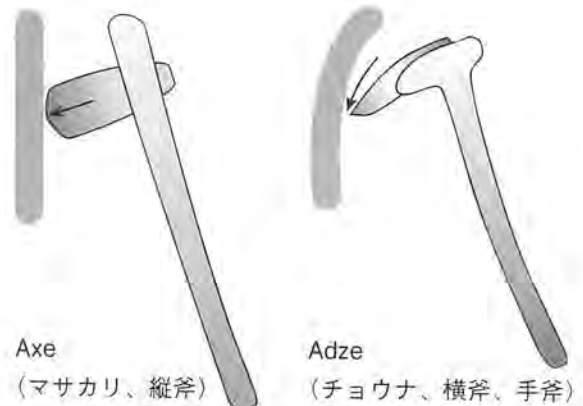
遺物包含層 土器・石器などの遺物を含む地層のこと（沖縄大百科事典より）。

琉球石灰岩 琉球列島に分布する第四紀更新世石灰岩の名称。更新世に珊瑚礁を形成した生物の石灰質遺骸が集積した堆積物で、それが地殻変動で隆起し台地を形成した（沖縄大百科事典より）。

遺構 過去の人間・人間集団の行動の結果として残された構築物（世界考古学事典より）。

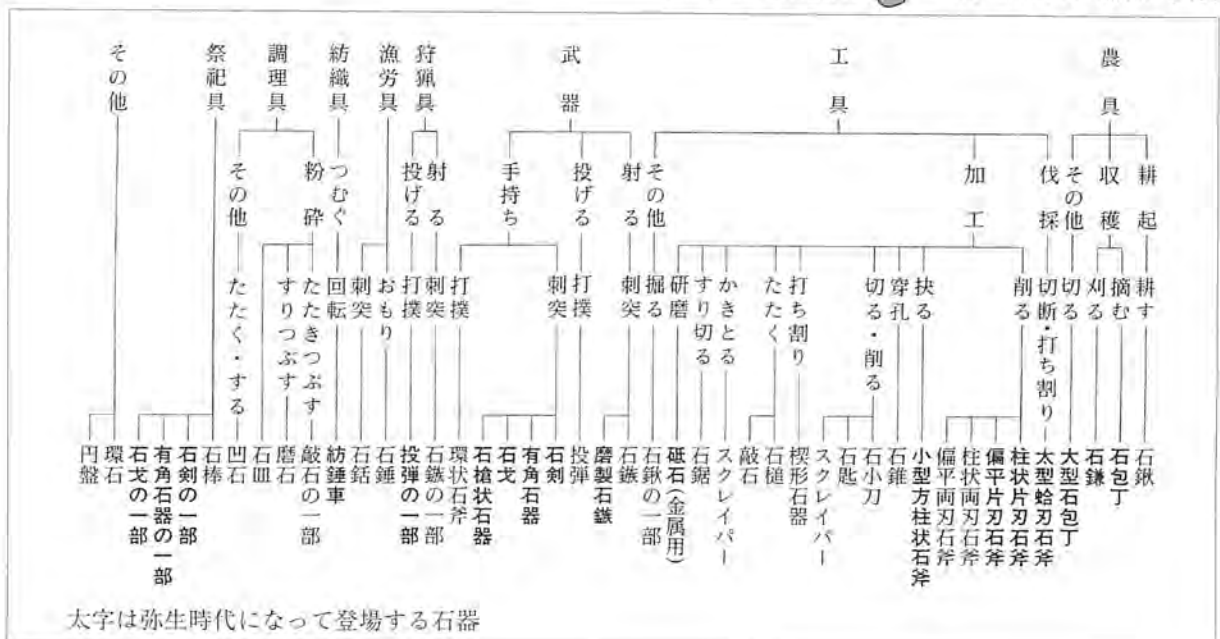
石器 石を素材として使われた道具。一般に道具の類を石器、装飾品等の非実用的なものを石製品と呼ぶ場合が多い。沖縄で発見される石器には石斧・磨石・凹み石・叩き石・石皿・石鏃・石錘などが知られる（沖縄大百科事典より）。

石斧 石製の斧。その製法によって打製石斧・局部磨製石斧・磨製石斧などに分けられる。刃の部分の形態から両刃石斧と片刃石斧があり、前者は刃を木製などの柄に平行に着装し、樹木の切り倒しや木工具としての斧となり、後者の片刃石斧は刃を柄と直角に着装し、いわゆる手斧のようになり、木工具や土掘り具、農具としての機能をもつ（沖縄大百科事典より）。



Axe
(マサカリ、縦斧)

Adze
(チョウナ、横斧、手斧)



石皿 やや扁平な岩塊の中央部をくぼめた盆状の石器。磨石・叩き石との併用で物の破碎・粉化に用いる（沖縄大百科事典より）。

磨石 石に摩擦痕を有する拳大の磨製石器。石皿との併用で物の破碎・粉化するのに使う。形が固形石蝕に類似し定形化したものがあり、石蝕状石器と呼ばれる（沖縄大百科事典より）。

叩き石 棒状・円柱状・楕円状あるいは球形の河原石の端部や周縁部に敲打痕のある石器。物を叩き潰すもの。この石器のほかの面には磨面やくぼんだ面をもつものも多く、叩きのみでなく、磨石や凹み石を兼ね備えた例が多い（沖縄大百科事典より）。

土器 水分を含んだ柔らかい粘土に、細かい石片や砂などのつなぎを混ぜて形を作り、加熱を加えて焼き上げた素焼きの容器（沖縄大百科事典より）。

胎土 土器の質（世界考古学事典より）。

施文 文様を描く行為のこと。棒や貝などの道具で土器が軟らかいうちに模様を付ける。

鋸齒文 三角形を連続して鋸の歯状に並べた文様（世界考古学事典より）。

押捺刻文 単範工具による押し引き文様。

荻堂式土器

北中城村荻堂貝塚の土器を標式とするもので、沖縄編年の前期後半を代表する型式の一つ。壺形と深鉢形があり、前者は希少である。深鉢形は4個の山形突起で口縁を飾る平底の器形で、胴上部から口縁へとすぼまり、山形突起の部分で外反する（沖縄大百科事典より）。



カヤウチバンタ式土器

国頭村宜名真カヤウチバンタ貝塚出土の土器を標式とする。器形は深鉢形を主体とし、壺形はまれだが、いずれも花鉢状の肥厚口縁に特徴がある。底部は平底である（沖縄大百科事典より）。



室川式土器

沖縄市室川貝塚のトレンチ16・17区の下部貝層を代表する土器。壺形と深鉢形があり、前者は希少。深鉢形の特徴は口唇部を幅広く造形するものや擬似肥厚をつくるものなど、口縁部を誇張するところに特徴がある（沖縄大百科事典より）。



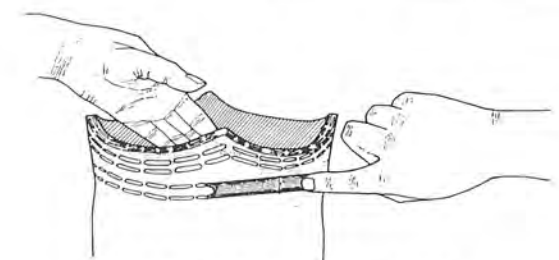
宇佐浜式土器

国頭村宇佐浜遺跡出土の土器を標式とするもので、口縁部が肥厚し、肥厚部分の断面が三角形または蒲鉾状を呈する。壺形、深鉢形があるが後者は希少である。底部は尖底が多い（沖縄大百科事典より）。



喜念Ⅰ式土器

徳之島伊仙町喜念貝塚出土の土器を標式とするもの。器形は外反した口縁部より頸部へしまり、胴部の張ったもので、底部は丸底が推定される甕形土器である。口縁部は直口のもの、肥厚して断面三角形を呈するもの、蒲鉾形のものなどがみられる（沖縄大百科事典より）。



土器に文様を描いている様子

絵：北嘉賀盛「沖縄の古代土器」の作り方」『あやみや』第2号 1994年

参考文献

- 世界考古学事典（上） 平凡社 1979年
- 沖縄大百科事典 沖縄タイムス社 1983年
- 奄美沖縄岩石・鉱物図鑑 新星図書出版 1985年
- 特別展琉球先史時代の器展 読谷村歴史民俗資料館 1979年
- 考古学資料集3 黒潮圏の磨製石斧 小田静夫編 1998年
- 弥生時代の石器 ニューサイエンス社 1991年

こ　　う　　り　　ば　　る
古宇利原 B 遺跡発掘調査報告書

—村道古宇利横田原線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告—

印刷 2004年 3 月31日

発行 2004年 3 月31日

編　　集　今帰仁村教育委員会
社会教育課 文化財係
TEL (0980)56-3201

発　行　者　今帰仁村教育委員会
沖縄県国頭郡今帰仁村字仲宗根232番地

印　　刷　有限会社 金城印刷
TEL (098)995-0001
